

日本オリエント学会だより

- | | | |
|-----------|----------|------------|
| 1) 第62回大会 | 2) 学会奨励賞 | 3) 作文コンクール |
| 4) 新入会員 | 5) 会員消息 | |

1) 第62回大会

期 日：2020年12月5日（土）～6日（日）（オンライン開催）

会 場：名古屋大学

担 当：第62回大会実行委員会

委員長：周藤芳幸

委 員：影山悦子，門脇誠二，河江肖剩，中野智章，西山伸一，村田光司

第1日 12月5日（土）

14：25～ 公開シンポジウム

16：00～ パネルディスカッション

17：00～ 第42回オリエント学会奨励賞授賞式

第2日 12月6日（日）

10：00～15：00 研究発表

参加者 299名

プログラム

第1日 第326回公開講演会

公開シンポジウム「オリエントの学際研究—エジプト学の未来—」

- ・ 馬場匡浩（早稲田大学エジプト学研究所・客員主任研究員）

「エジプトにおける学際研究」

- ・ 山花京子（東海大学文化社会学部アジア学科・准教授）

「古代エジプト・ファイアンス研究—研究領域のパラダイムシフトを目指して—」

- ・ 永井正勝（東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門・特任准教授）

「研究資源共有のためのプラットフォームの開発—二人の言語学者の発想から始まった言語資料のデータベース化—」

- ・ 森島邦博（名古屋大学大学院理学研究科・特任助教）

「宇宙線イメージングによるクフ王ピラミッド内部の新空間の発見と今後の展望」

パネルディスカッション

コメンテーター

- ・ 川本悠紀子（名古屋大学人文学研究科・准教授）

- ・ 安岡義文（早稲田大学高等研究所・講師）

モデレーター

- ・ 河江肖剩（名古屋大学高等研究院・准教授）

第2日 研究発表

研究発表者・題目

第1部会

1. 小高 敬寛・前田 修・下釜 和也・早川 裕弐・西秋 良宏・Nawshirwan Aziz Mohammed・Kamal Rasheed
イラク・クルディスタン、シャカル・テベ遺跡の後期新石器時代層
2. 三木 健裕
紀元前5千年紀、ザグロス山脈南麓における彩文土器の拡散・展開を再考する：バウンダリーオブジェクトとしての彩文土器
3. 山口 雄治・紺谷 亮一・Fikri Kulakoğlu
キュルテベ遺跡における前期青銅器時代の土偶と石偶
4. 鈴木 慎也
古代スリランカの水利施設の形状比較
5. 津村眞輝子
境界域におけるサーサーン朝ペルシアの貨幣：ホードの比較からみた地域別特徴
6. 青木 健
イランの仏教
7. 内記 理
ガンダーラ地方の仏教寺院における塔院と彫刻材質比率の関係
8. 下山 繁昭
高句麗文化の担い手が来た道：三本足の鳥につながる聖なる数字

第2部会

1. Ahmed Abdelaal
古代エジプト・中王国時代（第11・12王朝）のネクロポリス・テーベ
2. 高橋 寿光
土器からみた古代エジプト新王国時代の埋葬
3. 肥後 時尚
古代エジプトの「死者の書」における *mꜣꜣtꜣ*
4. 藤井 信之
前4世紀エジプトの軍事勢力をめぐる問題について
5. 坂本 翼
カラノグ遺跡の階層性
6. 間舎 裕生
中期青銅器時代・後期青銅器時代南レヴァントの都市における市門の位置づけ：市門の形態と機能の分析を通して
7. 藤澤 綾乃
初期ビザンツ期パレスチナの教会堂構造：アプス周辺構造と小礼拝堂の関わりについて
8. 田辺 理
東京国立博物館所蔵杯をもつヘラクレス像について

第3部会

1. 川上 直彦
GISによるアッカド王朝の中心都市「アガデ」の所在地探査：ティグリス川の古代流路との関連性による一考察
2. 菊地 咲
メソポタミアにおける暦注の注釈書の欠如に関する考察
3. 江原 聡子
ドゥムジからタンムーズへ：泣哭儀礼の様相
4. 西山 伸一・渡部 展也
新アッシリア帝国の拠点都市の周辺景観：ヤシン・テベ考古学プロジェクトからの考察
5. 柴田 大輔
ブロークン・オベリスクの王：アッシュル・ベール・カラカ、ティグラトピレセル一世か
6. 山田 重郎
被征服民のアッシリア帝国への帰属をめぐる一考察
7. 渡井 葉子
紀元前1千年紀バビロニアの都市民の家族における女性の役割
8. 山本 孟
ヒッタイトの祭儀における神々に近づく際の所作についての一考察

第4部会

1. 高橋 洋成
聖書ヘブライ語の不規則変化名詞に見られるセゴル型の痕跡：名詞の語幹交替を踏まえた新しい分類方法の提案
2. 新井 雅貴
ヘブライ語聖書における「レファイム（死者）」と死者儀礼
3. 築谷 温子
アラビア語の名詞文の主語の限定性と特定性

4. 竹田 敏之 現代アラビア語の標準化とクルアーン読誦学における流派間競合：ハフス流派の優勢化について
5. 五十嵐小優粒 ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞は本当に形容詞か
6. 宮川 創 コプト語の母音音素目録の再整理：コイナー・ギリシア語およびアラビア語との言語接触と古代エジプト語史の観点から
7. 村上 武則 クルド語クルマンジー方言の無接続詞文

第5部会

1. 相楽 悠太 イブン・アラビーの信仰論と「神の変容」のハディース
2. 平野 貴大 十二イマーム派による初期のキリスト教史理解：同派伝承中のペトロ・パウロ観をもとに
3. 角田 哲朗 フルーフィー教団における所謂「神の時代」について
4. 三代川寛子 20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興
5. 永井 悠斗 アル・ビールニーの伝えるインドの太陽崇拝
6. 宮島 舜 スフラワルディー哲学における強度について
7. 南澤 武蔵 オリент文明の高校世界史における今後について：次期学習指導要領とその変化

第6部会

1. 近藤 信彰 近世イランにおける講釈とその周辺：『ハムザ物語』を中心に
2. 鈴木 均 イラン近代史の叙述における時代区分の問題
3. 徳永 佳晃 レザー・シャー成立期のイランにおける選挙制度改革とナショナリズム：1304年選挙法改正（1925）
4. 矢本 彩 20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」発生の一要因としての徴兵問題
5. Khashan Ammar イスラーム的制度としてのワクフとその法学的構築：クルアーン・ハディースとイジュティハード
6. 三橋 咲歩 マムルーク朝後期カイロにおける都市と災害：ナイルの渇水を事例として
7. 小澤 一郎 19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討
8. 安岡 義文 マディーナット・アッ＝ザフラー王宮址の柱頭のプロポーシオンについて

第1部会

1. イラク・クルディスタン，シャカル・テペ遺跡の後期新石器時代層

小高 敬寛・前田 修・下釜 和也・早川 裕式・西秋 良宏・

Nawshirwan Aziz Mohammed・Kamal Rasheed

イラク・クルディスタン地域の南東部に所在するシャフリゾール平原は、いち早く新石器化が進んだいわゆる「肥沃な三日月地帯」の一角に位置しながら、ディヤラ川を介して最古の都市化の中核を担ったメソポタミア低地へと通じる、要衝の地である。新石器化から都市化への移行プロセスを定点的に追跡するうえでは、恰好のフィールドといえるだろう。ところが、「三日月地帯」の初期農耕牧畜民がメソポタミア低地の開発を始めた後期新石器時代半ば、前7千年紀後葉から前6千年紀前葉までの考古学的証拠は、発掘調査による確固とした付帯情報を伴う形でみつかっておらず、そのプロセスの解明を妨げている。

そこで2019年、私たちはこの考古学的空白を埋めるため、シャフリゾール平原の遺跡調査を実施した。天候不順の影響により、当初発掘を予定していた遺跡の調査は断念せざるを得なかったが、代替となる遺跡を探すため踏査を行ない、最終的にシャカル・テペ（Shakar Tepe）と呼ばれる遺跡を調査対象に選んだ。遺丘裾部に設けた長さ9.5 m、幅2 mの階段状トレンチを発掘した結果、トレンチ最上部の地表から5 mほど掘り下げたところ

ろで地山に達し、その直上に厚く堆積した後期新石器時代の文化層を検出することに成功した。

残念ながら、昨今の状況下で出土遺物の詳細な分析作業は滞っている。しかし、発掘現場での所見に基づくかぎり、土器や石器にみられる型式学的特徴は狙いとした年代幅に重なることを示唆していた。さらに、トレンチ内から採取し国内に持ち帰った多数の炭化物試料について放射性炭素年代測定を行なったところ、前6400～6000年頃との結果が得られた。これにより、所期の目的に即する、考古学的空白の一部を埋める文化層であることが確かめられた。

ただし、その土器アセンブリッジや石器インダストリーには、これまでほとんど知られていなかったような、特異な型式学的特徴をみせる資料が明らかに含まれることも分かっている。出土遺物の詳細な考古学的分析によって、まずはそうした未知の物質文化の内容を把握すること、そして、周辺地域における当該年代の物質文化と比較しつつ、メソポタミア低地が開発された時代におけるシャフリゾール平原の地域性を評価することが、次なる課題として残されている。

2. 紀元前5千年紀、ザグロス山脈南麓における彩文土器の拡散・展開を再考する：バウンダリーオブジェクトとしての彩文土器

三木 健裕

鈍黄色の地に黒色の彩文が描かれ、土器焼成窯で焼成された彩文土器は、紀元前5千年紀イラン、ザグロス山脈南麓一帯にかけて広範囲に拡散し、地域毎に様々な展開を見せた。先行研究ではこの現象の背景として陶工の移動、遊牧民の移動、通婚など様々な移動が主張されてきた。筆者はこの彩文土器の拡散・展開の実態を再検討する。この再検討にあたり筆者は、土器づくり等の実践を、共同体内における継承という観点に着目して扱う「実践共同体」という視点を導入する。そして彩文土器を、実践共同体間の境界を越えて各共同体を結びつける役割を果たす「バウンダリーオブジェクト」として捉え、背景にある人間の移動をこれまでの研究よりも柔軟に捉え直す。

筆者は対象地域としてザグロス山脈南麓にあるベフバハーンならびにズーレー平原を選択し、当該地域における彩文土器の拡散・展開を論じる。特に紀元前5千年紀中葉と推定されるテベ・ソフズ遺跡出土の彩文土器資料、紀元前5千年紀末葉のトレ・チェガ・ソフラ遺跡出土の彩文土器資料を扱う。テベ・ソフズ遺跡出土土器は現在ベルリン自由大学に所蔵されている。トレ・チェガ・ソフラ遺跡では、近年の発掘調査から、完形土器や石板が多数発見されている。ベフバハーン、ズーレー両平原は西部のスシアナ平原、東部のマルヴ・ダシュト平原という、独自の彩文土器文化が発達した地域の中に位置している。筆者はベフバハーン・ズーレー両平原の彩文土器の受容・展開の様相を、文様・器形・製作技術の選択と伝達に着目しつつ、スシアナ平原ならびにマルヴ・ダシュト平原における様相と比較する。その上で彩文土器の拡散・展開現象の背景にある人間の移動を予察する。

その結果、前5千年紀中葉のテベ・ソフズ遺跡では、土器の文様といった視覚的に認識しやすい属性にザグロス山脈南麓一帯との類似性が認められたものの、そうでない製作技術などの属性には相違が見られた。文様を広範な地域で緩やかに共有しながらも、細かな違いは各地域の実践共同体内で独自に発生したと推察される。前5千年紀末葉のトレ・チェガ・ソフラ遺跡では地域独自の文様が発達する一方、マルヴ・ダシュト平原の文様に類似した土器文様が特殊なコンテクストで発見された。前5千年紀末に三地域における彩文土器文化が顕著な地域性を見せつつ展開する中においても、東から西への移動・交流が存在していたことが示唆される。

3. キュルテベ遺跡における前期青銅器時代の土偶と石偶

山口 雄治・紺谷 亮一・Fikri Kulakoğlu

アナトリアの土偶や石偶は、後期銅石器時代以降、より抽象的、画一的な人物表現へと変化する。そのためか、前期青銅器時代の土偶・石偶研究は、それ以前の時代と比べると低調であると言わざるを得ない。しかし、前期青銅器時代はアナトリア史上、最も多くの土偶と石偶が確認されている時期である。したがって、土偶・石偶の社会的役割を明らかにすることは、アナトリアにおける前期青銅器時代社会の一つの特質を解明する大きな手が

かりとなるはずである。これまでの土偶・石偶研究は、アナトリア全体の変遷をまとめたものや、地域間の関係性を論じたものがあるが、前者は後者の、後者は前者の検討が不十分なものとなっている。古くから議論されている機能・用途論を批判的に継承するためにも、詳細な変遷や地域性を明らかにする基礎的な研究が必要である。

そこで本研究では、中央アナトリアに位置するキュルテベ遺跡の土偶と石偶の特徴を整理し、その年代的位置、変遷を確認した後に、周辺他地域との関係について明らかにすることを目的とした。その結果、基本的にスキーマティックな表現で、女性性を示唆する属性は認められるものの女性・男性を示す明確な表現はないことが明らかとなった。また、出土状況は墓と関連したものが多く、アスファルトによって修復された石偶や多量の石偶が一括して出土する事例など、製作・保管・管理・利用等を示唆するものを抽出することができた。

変遷や地域性については、EB（前期青銅器時代）I期の様相は不明ではあるものの、EB II期では、頭部のある／ない土偶・石偶に分類される。これらはアリシャルホック遺跡でも同様のものが出土していることから、その分布は中央アナトリアの南北に広がるのが想定された。EB III期になると、頭部のない土偶も少数認められるものの、アラバスター製で円盤状の体部に長い頸部と頭部をもつ、いわゆるキュルテベタイプが非常に多く出土するようになる。この石偶は、キュルテベ遺跡以外ではほとんど出土しておらず、アジェムホック遺跡と似たクズルウルマック河の南側でしか確認されない。したがって、EB II期とIII期では、土偶・石偶の形態とともに分布圏も異なることが明らかとなり、地域間の関係性もまた変化したことが考えられた。

本研究は、公益財団法人高梨学術奨励基金令和2年度若手研究助成およびJSPS科研費JP20K01097の成果の一部である。

4. 古代スリランカの水利施設の形状比較

鈴木 慎也

スリランカは、国土の4分の3がドライゾーンと呼ばれる乾燥地域で占められている。ドライゾーンの年間平均降雨量は約1,100 mmで、そのほとんどは雨季に降り、乾季の降雨量はわずか200 mm前後である。そのため、天水だけでは乾季の耕作は困難であったことから、限られた水資源を有効活用するために、古代から貯水灌漑システムが高度に発達してきた。本システムは、巨大貯水池の築造を可能としたソロウワと、複数のため池を連結した灌漑ネットワークにその特徴がある。ソロウワは、堤防に埋設された石造の暗渠式取水（排水）施設であり、取水暗渠部と排水暗渠部、そしてピソーコトゥワと呼ばれる立坑部から構成される。ソロウワは巨大な貯水池から決壊の恐れなく取水することを可能とした重要な遺構である。

しかし、ソロウワに関する考古学的調査・研究はほとんどなされておらず、これまでに報告されている平面図等の資料の大半は、100年以上前に刊行された著作物に掲載されたものである。また、劣化が進んでいる遺構が多く、盗掘や貯水池の修繕工事によって半壊、全壊してしまったものも少なくない。そのため、考古学的な基礎資料の収集とソロウワ独自の編年構築は緊喫の課題である。

本研究では、アヌラーダプラ県のコラスーガラ貯水池のソロウワを対象とした現地調査によって得られた、遺構の形状と規模について、他の遺構との比較考察を行った。その結果、対象遺構のピソーコトゥワの形状が、バラクラマパーフ1世（在位1153頃～86年）の治世に築造された2つのソロウワのピソーコトゥワの形状と類似することから、12世紀頃に築造された可能性が高いことが明らかとなった。また、ピソーコトゥワの底部からは、他に類例のない複数の柱穴を伴う張り出し部が確認された。これは内部に水量調節のための何らかの装置が存在していたことを示すものであり、ピソーコトゥワの機能を論じるうえで、本遺構は重要な事例であると言えるだろう。コラスーガラ貯水池は他のソロウワを伴う貯水池と比べ、極端に規模が小さいことから、限られた水資源を効率的に活用するために、何らかの水量調節装置を設ける必要性が高かったと推察される。

5. 境界域におけるサーサーン朝ペルシアの貨幣：ホードの比較からみた地域別特徴

津村 眞輝子

3～7世紀に西アジアの広大な地域を支配したサーサーン朝ペルシアが発行した銀貨およびその模倣銀貨は、

帝国領域を超えてヨーロッパから中央アジア、中国西域、東南アジアに至る迄広く出土する。なかには、数十枚から何千枚の単位で一括に出土する「ホード (Hoard)」も知られている。

本発表はこのホードに注目し、発行者構成、年代幅、さらに各地におけるホード以外の出土の傾向もあわせて比較をすることで、サーサーン式銀貨の各地域における流通実態を探ることを目的とした。東西の代表として中国新疆ウイグル自治区ウチャ出土ホードとイラン・クルディスタン (イラン西アゼルバイジャンとクルディスタン共和国との国境沿い) のピーラーンシャフル出土ホードをあげた。両者は枚数 (ウチャ918枚、ピーラーンシャフル1267枚)、発行年代 (ウチャ586~679年、ピーラーンシャフル531~663年) などが比較的類似したホードである。発行者の構成の共通点として、フスラウ2世 (在位591-628) 貨が占める割合が多い点があげられる (ウチャ59.5%、ピーラーンシャフル76.1%)。この傾向は帝国中心地 (イラン・ベヘシュール、バビロン、スーサ) および西側から出土するホード (アルメニア・ドゥヴィン) だけでなく、時期が遅い8世紀のホード (シリア・ダマスカス) でも同様である。フスラウ2世貨が広範囲にわたって長く大量に流通していた可能性を示す。一方、オフルマズド4世 (在位579-590年) 貨がウチャでは1枚であるのに対し、ピーラーンシャフルでは203枚 (全体の16%) と多い。これは同じく西側の同時期のホードに、フスラウ2世貨よりオフルマズド4世 (在位579-590年) 貨が多いホード (ジョージア・ツイテリツカオ) がある点が注目される。さらに多くの事例との比較が必要である。その他、東側に多い追刻印が西側のホードに殆ど無い点や、サーサーン銀貨以外の共伴コインの違いなど、帝国の西側と東側から出土するホードの相違点を示した。

コインを大量に発行する背景には軍資金や賠償金を必要とする状況が多々あり、またそれがホードとして残る理由には戦時の備蓄用であることも多い。今後はこのようなホードの特徴を鑑み、歴史的、地理的背景をあわせて検証することで、境界域における貨幣の使われ方の実態に近づきたい。

6. イランの仏教

青木 健

紀元前後の頃、インド亜大陸に発した仏教がカイバル峠を越えてイラン高原東部に西流した事実は、バクトリアに点在する遺跡から見て、もとより疑いようがない。しかし、仏教伝播の流れは此处から急角度で東流し、パミール高原を越えてタリム盆地へと向かい、遂にイラン高原を西へは向かわなかったとされる。仏教西漸の限界をバルフ=カンダハールを結ぶフーシェ・ラインに求める仮説は既に有効性を失っているが、現在知られている仏教遺跡の西端はマルギアナのギャウル・カラに過ぎない。21世紀に入ってからは、ムルガブ川流域のベンジデフやヒンドゥークシュ山脈中のケリーガーンで仏教遺跡が発見されたとの報告があるものの、いずれもイラン高原西部には及んでいない。

だが、この当時のシルクロードは、中国と地中海世界を結ぶユーラシア大陸の主要幹線であって、インド亜大陸と中国だけを結んでいた訳ではない。それを考えると、仏教がイラン高原東部から西進しなかったのは不思議である。通常、この理由は、「イラン高原では、国家宗教として強力な組織力を持つゾロアスター教が仏教の行く手を阻んだ」と説明される。しかし、現在のところ、アルシャク朝時代のゾロアスター教が国家宗教だったとの証拠は見出されておらず、サーサーン朝時代のゾロアスター教にしても、9世紀のゾロアスター教中世ペルシア語文獻にはその旨の記述があるだけで、後代の願望を投影した可能性を排除できない。即ち、仏教西漸を阻止するような組織力は、当時のゾロアスター教神官団には乏しかったと考えられている。

この状況を逆に言えば、仏教がイラン高原上を西進していなかったとの前提に疑義が生じる。例えば、マニ教の教祖マーニーは、開教の初期段階で、メソポタミア平原やイラン高原西部に居ながらにして、仏教を取り込もうと努力している。3世紀のキルデアールによるカァベ・イエ・ザルドシュト碑文には、ゾロアスター教が駆逐すべき対象として「シュラマナ=沙門」の名称が挙がっている。これらを考え合わせると、少なくとも3世紀以降のイラン高原西部には、ある程度仏教が西進していたとの前提から出発する余地がある。本発表では、イラン高原のイスラーム化が完了する10世紀以前に、イラン高原上に仏教の痕跡と考えられる証拠がないかを探りたい。

7. ガンダーラ地方の仏教寺院における塔院と彫刻材質比率の関係

内記 理

ガンダーラ彫刻の編年が困難な理由の1つは、寺院の創建時期と出土する彫刻の制作時期が必ずしも一致しないことである。仏塔や祠堂を飾るための彫刻が、寺院の創建時だけでなく、活動期間のいつでも制作されるためである。さらに彫刻の編年研究を困難にするのは、西北インドの仏教寺院において彫刻の大部分が寺院の最終段階の遺構に伴って出土することである。これらの要因から、どの彫刻が寺院のどの段階でつくられたものであるかについての判断は難しい。

そのような状況の中で、Ranigat寺院址の発掘調査で出土土器が細かに分析され、また他の寺院址から出土した土器との比較検討がなされたことにより、各寺院の活動期間が示された意義は大きい。寺院の活動期間は、その寺院から出土した彫刻が制作されることのある可能な時間幅を示すためである。活動期間の異なる寺院址から出土した彫刻を比較すれば、彫刻の新古の様相を把握できる可能性がある。しかしながら、土器編年によって活動期間の分かった寺院はそれぞれ300～500年と長期間に渡って活動しており、これらの遺跡から出土した彫刻を比較するだけでは彫刻の制作時期の違いを細かに分析することは難しい。

それぞれの寺院に長い活動期間があるのであれば、やはり寺院間だけでなく寺院の内部においても彫刻を分析する必要がある。寺院内部で彫刻の新古を検討する際に一つの手掛かりとなるのは、寺院の多くが複数の塔院から構成される点である。例えば、Ranigat寺院址やThareli寺院址においては、主塔院とは別に副次的な位置づけの塔院が見つかっている。それらの塔院の造営時期の順序関係が分かれば、彫刻の制作時期についても考察することができるようになる。

そこで、本発表では、ガンダーラ地方の寺院の塔院間の造営順を知るための手段として、彫刻の材質の比率の分析が有効であるかどうかを確認する。彫刻材質の比率は、これまでの研究でも、寺院間の活動時期の違いを説明するのにしばしば着目されてきた。寺院間でのみおこなわれてきた材質比率の分析を、本発表では寺院内部の塔院間でおこなった。すでに塔院の造営順が判明しているRanigatで確認すると、彫刻の材質の比率の分析が、寺院間だけでなく塔院間の造営時期の違いを考察する際にも有効であることが分かる。塔院の造営時期の前後関係が明確でなかったThareliにおいても、彫刻の材質の比率を分析することで、それを明らかにすることが可能である。

8. 高句麗文化の担い手が来た道：三本足の鳥につながる聖なる数字

下山 繁昭

オリエントとつながる三本足の鳥の紋章を持つ高句麗文化をもたらした人々は朝鮮半島北東部から日本列島に直接来たと推定される。推定根拠として、本源地には、慈江道楚山郡蓮舞里（りょんむり）2号墳がある。この墓の形式は四隅突出積石墓であり、紀元前1世紀頃のものである。また同じ形式の墳丘墓が日本海側にある。四隅突出型墳丘墓という弥生時代後期の墳墓である。これは、出雲と高志（北陸地方）にだけ存在する。本源地の人々は、出雲や高志に移動した。原因は、高句麗の南下である。それにより、まだ高句麗に統一されていない部族すなわち濊（わい）、東沃阻（よくそ）、等の一部の部族が四隅突出積石墓と製鉄技術を持ち、二つの地域に移り住んだ。彼らに移り住んだ遺跡に、鳥根県出雲市大津町の西谷墳墓群と福井県小羽町の小羽山30号墓がある。同じ道を使って高句麗の三角隅持ち送り式天井を持つ古墳が日本海側に伝播した。四隅突出墳丘墓の先行研究の内、山本清は起源を高句麗の積石塚に求めた（1975年）。注目すべきは天井である。三角隅持ち送り式天井を持つ遺跡は、①兵庫県美方郡香美町村岡区福岡にある八幡山古墳5号墳、時期は5～6世紀、②丹波市春日町、坂古墳1号、2号前方後円墳、時期は6世紀～未定、③石川県七尾市能登島町須曾町、須曾蝦夷穴古墳、7世紀中葉前後、が挙げられる。これらの三角隅持ち送り式天井の源流はバルティアの都城址のニサに在り、時期は紀元前3～2世紀である。また、この様式はバルティアからアルメニア（アニ遺跡）次にブルガリア（カザンラク墳墓）に見られ、草原の道とシルクロードを通じて遙か日本にまで伝わった。三角隅持ち送り式天井を持つ古墳は兵庫県に多い。評の制度を最初に導入したのが兵庫である。しかし評の字を用いた地方組織があったのは高句麗だけ

である。下地があったから導入出来た。三本足の鳥の紋章と三角隅持ち送り式天井と三に拘るのは三を聖なる数字と捉えたからである。後に古墳に鋸歯紋の三角縁神獸鏡を埋納することも同じ考えである。すなわち、古墳の隅、鏡の隅を三角で瘴邪から守るという考えである。国造りの始まりである三輪神社、そこに三鳥居がある。出雲大社のうず、三本柱。三巴の紋章。天照神話の三人兄弟の話。三種の神器の三。邪馬台（壱）国も三字で表現。日本の龍は爪が三本である。孝明天皇の御礼服にも三本足の鳥と三本の爪の龍が使われた。文化をもたらした人と彼らが来た道があり天の思想が伝わったのである。

第2部会

1. 古代エジプト・中王国時代（第11・12王朝）のネクロポリス・テーベ

Ahmed Abdelaal

テーベは、エジプトの首都カイロから南に約500 kmに位置する現在のルクソールにあたる地域である。中王国時代（紀元前2020～1794年頃）以降、古代エジプトの政治や宗教の中心的拠点として歴史の表舞台に登場するようになった。特に、テーベの神であるアメン・ラー神が国家の最高神になると、テーベの影響力は絶大なものになった。

フリーデリケ・カンブ（Friederike Kampp）の研究によって414基の登録墓の他に未登録の岩窟墓を322基追加しており、総計で736基の岩窟墓を記載している（Kampp 1996）。これまで、新王国（第18～20王朝）時代を中心とする岩窟墓の研究が中心に行われてきた（Smith 1992; Richards 2005）。しかしながら、新王国時代以前、特に、中王国時代の岩窟墓がどのようなものであったのかに関して、包括的な研究は、あまり行われておらず、本発表では、ネクロポリス・テーベにおける中王国（第11・12王朝）時代の岩窟墓の展開をまとめる。特に、中王国時代に放置され、新王国時代以降に再利用されたとみられる岩窟墓について報告する。

本発表では、中王国（第11・12王朝）時代のネクロポリス・テーベの展開を理解するため、二つのテーマに分けて発表した。ひとつ目は、ネクロポリス・テーベにおいて、新王国時代以前、特に中王国時代の岩窟墓の展開について、ふたつ目は、中王国時代以降に再利用された岩窟墓についての問題である。メンチュヘテプ2世は、王族墓・高官墓をそれ以前に造営されてきたアル＝ターリフ地区から、初めてアル＝ディール・アル＝バハリ地区に移転させた。このことにより、墓域の中心が、テーベ西岸北部からテーベ西岸の中央部へ移った。

ジョベック（E. Dziobek）らが指摘するように、中王国時代に造営され、新王国時代に再利用されたと考えられるテーベ私人墓第67号墓(TT.67)、第71号墓(TT.71)、第81号墓(TT.81)、第83号墓(TT.83)、第117号墓(TT.117)、第167号墓(TT.167)などの岩窟墓が、王都がイチ・タウイに移されたことから、未完成のままに放置された第12王朝時代初期のものと考えられてきたが、これらの岩窟墓の平面プランから判断すると、これまで推定されてきた第12王朝時代のものではなく、より古い第11王朝時代のものとして推定できるのではないかと考えた。

2. 土器からみた古代エジプト新王国時代の埋葬

高橋 寿光

エジプト、カイロ近郊に位置するダハシュール北遺跡には中王国時代から新王国時代の墓地があり、これまでの調査によって、大小200を超える墓が発見されている。本発表では、特に第30号墓から発見された新王国時代の土器群を対象とし、どのような埋葬が行われていたのかを明らかにしてみたい。

調査研究の結果、土器群は、類例から新王国時代のトトメス4世からアメンヘテプ3世の時代に年代づけることができた。また、土器の機能によって「赤色土器破壊の儀式に用いられた土器」、「再生復活の儀式に用いられた土器」、「副葬品として用いられた土器」の3つのグループに分けることができた。

「赤色土器破壊の儀式に用いられた土器」のグループには、胴部に意図的に穴が開けられた赤色の壺が含まれている。赤色土器破壊の儀式とは、その名の通り、赤色の土器を意図的に破壊する儀式であり、あの世の敵を打ち滅ぼす意味があったとされている。古代エジプトで広く知られる埋葬時の儀式であり、新王国時代では、サッカー遺跡のホルエムヘブ墓などのレリーフに2つに割られた赤色の土器が描かれている。出土した土器は、レリー

フに見られるのとは異なり、丁寧に穴がくり抜かれていたが、赤色土器破壊の儀式に使用されたと判断した。

「再生復活の儀式に用いられた土器」のグループには、黒色の樹脂が入ったアンフォラがある。再生復活の儀式とは、棺に黒色の樹脂を埋葬時にかけることにより、黒色の肌を持つオシリス神と同一視されるようになる、という儀式である。文字資料などでこの儀式の存在は知られておらず、重要な資料を提供することとなった。

「副葬品として用いられていた土器」のグループには、石製容器の模倣土器や花輪の装飾が施されたアンフォラなどがある。こうした土器は、これまで主に南部のルクソール地域で知られており、北部でも同様の副葬品が用いられていたことを示す資料として重要である。

本研究により、埋葬に際して、少なくとも2つの儀式が行われていたことや来世のためにどのような土器を副葬品として納めていたのかが明らかとなった。新王国時代の埋葬については、これまで壁画や文字資料を中心に研究が行われてきた。このような研究に加え、本研究では墓に残された物的証拠から、実際にどのようなことが行われていたのかを具体的に示すことができた。

3. 古代エジプトの「死者の書」における *mꜣty*

肥後 時尚

古代エジプトのマアト女神は、「宇宙の秩序」や「正義」、「真実」の意味をもつ抽象概念マアト (*mꜣt*) の神格化である。この女神は通常、頭にダチョウの羽根を載せた一柱の女性の姿で描写される。その一方で、「死者の書」をはじめとする一部の史資料のなかで、この女神は「二柱のマアト」(*mꜣty*) と呼ばれる二柱の女神として現れる。本来一柱である女神が二柱の女神に変化する事例は、古代エジプトの宗教においても稀であり、研究者によって変化の理由や個々の女神の役割に関する多様な解釈が示される一方で、依然としてその最終的な結論に至っていない。このような研究状況から、発表者はこれまでの研究において、「二柱のマアト」との関連を示すマアトの語の双数形 *mꜣty* に注目し、古王国時代、中王国時代の史料の記述の分析を通して、その意味を明らかにしてきた。その結果、「二柱のマアト」を意味する *mꜣty* の語の意味が時代の変遷に伴い変化していたことが明らかとなった。

本発表では、次なる研究段階であるエジプト新王国時代以降の *mꜣty* の解明を見据え、古代エジプトの「死者の書」に注目した。「死者の書」は、現存する史料のなかで最も明確な *mꜣty* の描写をもつことから、*mꜣty* をめぐる先行研究の多くが「死者の書」第125章上の「二柱のマアト」の図像と記述に言及している。本発表では、「死者の書」における *mꜣty* 研究の出発点として、先行研究の成果と課題の整理を踏まえ、第18王朝のヌウのパピルス (EA 10477) を事例に「死者の書」第125章の再検討をおこなった。その結果、この呪文において *mꜣty* の語が先行研究において言及される「この二柱のマアトの広間」(*wsht tn nt mꜣty*) の一部として記述されるだけでなく、オシリスの形容辞 *nb mꜣty* や *mꜣty* と呼ばれる特定の場所の名称としても記述されることを明らかにした。

4. 前4世紀エジプトの軍事勢力をめぐる問題について

藤井 信之

この発表では、これまで発表者が進めてきた後期王朝時代の軍事称号所持者のプロソポグラフィ研究の成果の一端に基づいて、近年の研究史上で問題となっているアレクサンドロス到来後の彼らの動向を検討した。

アレクサンドロス到来後もエジプトの軍事勢力は少数ながら新たな支配者たちの軍制の中に取り込まれていたと考える研究者がある一方で、こうした見方に否定的な研究者もいる。この立場の研究者は、アレクサンドロス後とされる将軍の数は少なく、その年代比定も確かではないとする。しかし前4世紀以降の将軍は、史料がもとも乏しい地域にその存在が知られていることに留意する必要がある。史料の年代比定については、型式学、碑銘学、綴り字法など、いずれにおいても現状ではアレクサンドロス前か後かを判断できる指標となるようなものはない。しかしこのことは、第30王朝期の人物とされている将軍の中にもアレクサンドロス後まで生きた将軍がいる可能性を考えさせることになる。

この発表で注目したのが「陛下の第1の大將軍」とされる軍事称号所持者である。この称号所持者はネクタネ

ボ2世の息子を含め4例がネクタネボ2世の世代かその後の世代に属している。他の8例もアレクサンドロス後まで生存しなかったという証拠はない。第30王朝と血縁関係にあった第30王朝期の有力将軍は、いずれも「陛下の第1の」という形容辞を持たない。これらのことから「陛下の第1の大将軍」は、アレクサンドロス到来後の将軍であった可能性が高いと考えられることを指摘した。

プトレマイオス2世期のエジプト語碑文史料にも在地エジプト人の軍事指揮官の存在を伝える史料があることから、エジプト人将軍はプトレマイオス2世治下までは存在したと考えられる。前4世紀の将軍たちの多くは、勢力基盤となっている地域の神官号を兼帯しており、その称号所持形態はリビア王朝時代の諸侯たちと同じである。最後の独立期の支配層を形成していたのが彼ら諸侯であり、彼らはペルシアに対する最大の抵抗勢力でもあった。アレクサンドロス到来後の支配者たちは、エジプトを円滑に支配するため彼らを在地諸侯として取り込み体制内化を図ったと考えられる。そして軍制に取り込みシリア戦争などに従軍させたとは限らないので、このように考えれば古典文献史料の記述とも矛盾することはないということを指摘した。

5. カラノグ遺跡の階層性

坂本 翼

カラノグは、スーダン北部に栄えたメロエ王国（前4世紀～後4世紀）の社会を理解するうえで欠かすことのできない重要遺跡の1つである。20世紀初頭に行われた発掘調査により150点以上の碑文が出土しており、そこに記された内容から、かつてカラノグで生活を営んでいた集団の親類関係や役職を垣間見ることができる。その頂点に君臨するのが総督（peseto）である。ところが、このように明確な階層性が指摘されているにもかかわらず、大規模な盗掘を理由として墓域の考古学的研究は等閑に付され、結果的に、碑文史料を大きな拠り所として組み立てられてきたメロエ王国の社会像には再検討の余地が残されている。本発表では、カラノグで検出された785の埋葬施設を型式学的に検討、階層差を抽出し、そこから在地勢力の動態に迫る。

発掘者は埋葬施設を4型式に分けている。このうち、再利用墓として設定された型式Dを除くと、順に地面を垂直に掘り下げて造出した矩形空間に泥レンガで埋葬室を設けた墓、地面を掘り下げて造出した傾斜路の延長線上に岩窟の埋葬空間を設けた墓、地面に垂直のシャフトを掘りその最深部側壁に簡素な埋葬空間を穿った墓の3型式が存在する。それぞれ52基（A）、625基（B）、62基（C）が墓域で検出されている。次に、供物台や石碑、葬送用彫像といった威信材との対応関係を見ると、順に31個体（A）、153個体（B）、6個体（C）が出土している。ここからは威信材が型式Bに対して優先供給されている様相が見出され、翻って、メロエ文字を解する神官や書記といった社会的上位階層がこの型式の被葬者集団に含まれていた可能性が高い。他方、型式Aでも威信材が特定の細分型式（A1）に集中することから、この細分型式の被葬者にも威信材へのアクセスが例外的に許されていた可能性が高い。実際、これまで確認されている総督の埋葬施設はすべからず型式A1に分類されており妥当な指摘と考えられる。

以上の考古学的知見を踏まえると、埋葬施設の形態差の背後に、葬送儀礼に精通した神官や書記を中心とする被葬者集団（型式B）、総督を頂点とする被葬者集団（型式A）、および少数の下層集団（型式C）が存在することが明らかになった。今後は、碑文に言及される各職階と埋葬施設の関係、および型式AとBの政治経済的関係の解明が主な課題となる。

6. 中期青銅器時代・後期青銅器時代南レヴァントの都市における市門の位置づけ：市門の形態と機能の分析を通して

間倉 裕生

南レヴァントでは中期青銅器時代IIB期の都市の発展に伴い、居住域の周囲には土塁や斜堤などの防衛施設が建設されるようになる。市門はそれら要塞化された都市の出入口として、同じく堅牢につくられている。この時代の市門の形態は、通路の両側に建てられた塔と、そこから通路側に突出した二対四本、ないし三対六本の「柱」によって特徴づけられる。これらの市門に対しては、上記の形態分類案のほか、シリア・メソポタミアに起源を

持つことが示されてきたが、あくまで「防御施設の一部」としてしか議論されてこなかった。一方で、鉄器時代Ⅱ期に登場する新たな形態の市門は、考古学や旧約聖書の記述などから、集会や裁判などが開かれる多様な性格を持っていたとされる。本発表では、市門の多様な機能が形態の変化に伴って付与されたものなのか、それとも青銅器時代にすでに備わっていたものなのかを検討した。

鉄器時代の市門には公共建築が隣接し、市門自体の公共的性格と関連するとされてきた。一方であまり注目されていないものの、中期青銅器時代のシケムでは神殿が、後期青銅器時代のメギドでは宮殿が、それぞれ市門に隣接して建てられている。このことは、市門の公共的な性格が青銅器時代にも存在することを示している。また、近年発表されたヤフォの調査報告によると、市門の通路上からは大量の土器のほか、計量用土器や鉛製分銅などが出土しており、市場として利用されていたと考えられている。鉄器時代の市門周辺に市場があったことは旧約聖書の記述から知られており、共通する性格である。最後に、現在のところ接続する周壁が存在しないテル・レヘシュ出土市門について予察を行った。同様にほかの防御施設と接続しない市門の例としてはメギドのものがあるが、これは隣接する宮殿との複合建築として計画されたものであり、為政者の権威を示す象徴的な機能を持っていた可能性がある。テル・レヘシュの市門も独立したものであった場合、同様に「防御」とは異なる象徴的な機能を持っていたのかもしれない。

以上のように、中期青銅器時代・後期青銅器時代の市門にも、複数の機能が備わっていた可能性を示した。今後は「防御施設」の一部としてだけでなく、都市計画全体の中での市門の位置づけを考えるべきであろう。

7. 初期ビザンツ期パレスチナの教会堂構造：アプス周辺構造と小礼拝堂の関わりについて 藤澤 綾乃

本発表では、初期ビザンツ期パレスチナ（現イスラエル／パレスチナ）におけるキリスト教信仰の在り方について探るべく、教会堂のアプス周辺構造と小礼拝堂との関わりについて検討した。分析対象のユダヤ・サマリア地域は、パレスチナでもとくに教会堂遺構の事例が多く125基ほど確認されているが、ネゲヴ地域やガリラヤ地域ほど研究が進んでいないため検討の余地が残されている地域である。

これまでパレスチナではアプスの両対に小部屋を伴うバシリカ式が多く確認されてきた（Crowfoot 1941）。さらに、ネゲヴ地域やガリラヤ地域の一部では小部屋が6世紀頃に副アプスへと改変された事例も確認され、この型式変化は聖人・聖遺物崇敬の発展と関連づけられてきた（Negev 1974; Margalit 1989）。そして近年では、教会堂に隣接して建てられた小礼拝堂との関係性も見出されている。パトリックによれば、もともとは聖体拝領の儀の役割の一部をアプスの両対の小部屋が担っていたが、6世紀頃から新たに導入された小礼拝堂にその役割が移されたとされる（Patrich 2006）。それによってアプス両対の構造は副アプスへと改変され、聖人・聖遺物崇敬の役割を果たすようになったとされる。

以上を踏まえ、本発表ではユダヤ・サマリア地域を対象に分析を行った。分析は二段階に分け、まずアプス周辺構造について明らかにされている76基の型式変化を追った。その結果、初期ビザンツ期のいずれの年代においても、小部屋が設けられた事例とアプスが壁から突き出すように配置され両対に空間が存在しない事例が一定数確認された。一方、アプス両対に副アプスが設けられた事例は6世紀頃から僅かに出現傾向が見られたが、聖人・聖遺物崇敬の影響と結びつけるには事例が少なく実証は困難であることを提示した。次に小礼拝堂の存在が明らかにされている11基の付設時期を確認した。その結果、小礼拝堂は全て6世紀に付設されていたことが明らかになった。そしてアプス周辺構造の変化と掛け合わせて検討したところ、アプス両対の構造が小部屋として保たれつつ小礼拝堂が付設された事例が大半を占めていたことを確認した。以上をまとめ、アプス両対の小部屋の役割が小礼拝堂へと移り変わり、その跡地に聖人・聖遺物崇敬の役割を担う副アプスが設けられたという先行研究での見解は再考の余地が残されていることを示した。

8. 東京国立博物館所蔵杯をもつヘラクレス像について

田辺 理

ヘラクレスは、オリュンポス十二神の主神ゼウスの子供で、ギリシア神話に登場する半神半人の英雄である。ヘラクレスを表現した美術作品は、彫刻、陶器や金属器などの工芸品、モザイク画など、多岐にわたり、その作例は非常に多い。また、ヘラクレス像は東漸し、西アジアや中央アジアの美術作品にも表現され、就中ガンダーラにおいて釈迦牟尼の随伴者である執金剛神として仏教美術に取り入れられた。その結果、仏教美術とともに中国を経て日本までに伝わった。それ故、今日では、ヘラクレスはギリシア神話のみの英雄にとどまらず、全世界的な英雄といえる。

通常、ヘラクレス像は、筋骨たくましい男性が棍棒、弓矢、鎌などをもち、獅子の毛皮をもつないしは被る姿で表現される。しかしながら、東京国立博物館所蔵のヘラクレス像は、卷毛の鬚を生やし、右手を下ろした棍棒の上ののせ、左腕に獅子の毛皮をかけ、左手に杯をのせている。本像は、イラク北部のハトラから出土したヘラクレス像であるが、本像についての専論は内外において殆ど見当たらず、これまで研究対象となつてこなかった。それ故、本発表では、このヘラクレス像を考察し、この像が有する意味を考察した。

はじめに、ハトラから出土したいくつかの杯をもつヘラクレス像を紹介した。ハトラから出土した全ての杯をもつヘラクレス像が、右手を下ろした棍棒の上ののせ、左腕に獅子の毛皮をかけ、左手に杯のような容器をのせる形式をとる。この形式は、グレコ・ローマ美術の影響と考えられる。グレコ・ローマ美術に見られるヘラクレス像を概観すると、トルコのティンブリアナッソスの岩壁浮彫に見られる帝政ローマ時代のヘラクレスが類似した形式をとるので、ハトラの杯をもつヘラクレス像は、グレコ・ローマ美術の影響によって作成された蓋然性が大きいことがわかる。最後に、ウルスラグナ神、ネルガル神、ガッド神、バッカス神などの西アジアのヘラクレス神像が有する職能との比較考察を行った。その結果、ハトラでは、ネルガル神ないしはガッド神がヘラクレス像と習合しているが、ヘラクレス像がもつ杯は、バッカス神の影響であると考えられる。結果として、豊穡の神であるガッド神とヘラクレスが習合したのは、バッカス神が有する豊穡多産の職能の影響を受けたことによると結論づけた。

第3部会

1. GISによるアッカド王朝の中心都市「アガデ」の所在地探査：ティグリス川の古代流路との関連性による一考察

川上 直彦

紀元前2300年頃、サルゴン王がアッカド王朝を設立し、古代メソポタミアに覇権を唱えた。そして、古代都市「アガデ」をその中心都市として新たに定めた。140年以上前より、この「アガデ」の所在地が探査されてきたが、未だその所在地は発見されていない。「アガデ」の所在地を示す地理情報を包含する文献史料は多数存在する。それらの内、「アガデ」の所在地を客観的な視点から直接的に示している地理情報は、文献史料：①サルゴン王の娘であるエンヘドゥアンナが書いたシュメール神殿賛歌集、②マリ出土の古バビロニア時代の書簡2通、③ハムラビ法典序章、④エラム王のシュトルク・ナフンテ王碑文、に包含されている。これらの地理情報から、「アガデのコア所在地域」が、シッパルの北部、エシュムンナの西方、そしてドゥル・クリガルズ、シッパル、エシュムンナ3都市の近接地域内に推定できることが、GIS (Geographical Information System) による地図作製分析から明らかとなった。

次に、文献史料：①アッカド王朝またはウル第3王朝時代の北部バビロニア地域のエンシ・リスト、②都市滅亡哀歌のアッカドの呪い、③アケメネス朝キュロス2世の円筒王碑文、が包含する地理情報から、「アガデ」がティグリス川沿岸に位置していた可能性が高いことが明らかとなった。ティグリス川の古代流路は、現在の流路と違う場所を流れていたため、これらの地理情報を基に、現在のティグリス川流路沿岸に直接的にアガデの所在地域を位置付けることはできない。そのため、その古代流路が、「アガデのコア所在地域」内のどこを流れていたのかを、GISをつうじて数値標高モデルを用いた立体地形図により検証し、復元した。そして「アガデ」の所在地域を、「ア

ガデのコア所在地域」内に復元したティグリス川の古代流路沿岸5 km地域に推定した。

更に、この限定したティグリス川の古代流路沿岸地域に、GISによりジオレファレンスした遺丘の分布図をオーバレイし、「アガデ」と推定可能な遺丘が実際に存在するのかを分析した。その結果、初期王朝時代からアッカド王朝時代に年代付けできるテル・シンカーが、「アガデ」と推定できる唯一の遺丘であるとの結論に至った。

2. メソポタミアにおける暦注の注釈書の欠如に関する考察

菊地 咲

本発表では、注釈書の欠如という暦注の特殊性について考察する。その日の吉凶や活動規定を示す暦注書は、メソポタミアにおける多種多様な占いの一角をなす、暦占いの代表的なテキストに数えられる。古い文書は、そのテキストの難解さと学術的重要性から、注釈活動の対象とされ、紀元前1千年紀には多数の注釈書が作成された。しかし暦注書は、古い文書であるにもかかわらず、専用の注釈書を持たない。暦注への注解は、暦注書の一形態である編纂書にまれに登場するのにとどまる。本発表ではこの編纂書に着目し、注釈書との関係性を検討する。

注釈書は、難解な文言や不明確な記述に解説を施す。また注釈対象の文書に複数の伝承やヴァリエーションがある場合、それらを補足的に提示する。これにより注釈書は、既存の文書のアクセシビリティを更新し、伝承されてきた「知」を正当化する役割を果たす。また、テキストの変更と発展はあくまで注釈書上で行われるため、基礎テキストの文言の保持にも寄与する。注釈書における注やヴァリエーションの導入には、専門用語 *šanīš* 「あるいは、第二に」、*Glossenkeil*, (KI.) MIN が用いられる。

暦注の編纂書において原本となる複数の著作は、その本来の文脈を離れ1日単位に分割された後、暦に従って再度まとめ直される。すなわち編纂書では、各日のエントリーそれぞれにおいて、複数の暦注伝統が収集され、列挙されていると説明することができる。また、一つの暦注書の異なるヴァリエーションを書き並べる例も確認できる。複数の伝統とヴァリエーションの提示は、注釈書の作成過程と構成を想起させる。さらに編纂書における注解の挿入には、注釈書と共通する専門用語と手法が用いられる。すなわち暦注については、編纂書が注釈書に変わって、注の付与とヴァリエーションの提示という役割を担っている。

ほか、紀元前1千年紀にアッシリア王と学者の間で交わされた書簡には、暦注を引用し特定の活動の日取りを提案するものが数点見つかっている。そのなかにも、異なる複数の暦注書が引用されている例 (SAA 10 379) や、引用された暦注に注が施されている例 (SAA 10 74) が確認できる。

以上から、暦注への注釈活動が編纂書や書簡などの注釈書以外の場で行われ、注釈書とは異なる形で文章化されていたことが、暦注が専用の注釈書を持たない要因として考えられる。

3. ドゥムジからタンムーズへ：泣哭儀礼の様相

江原 聡子

北シリアの都市ハラン *Ḥarrān* は、シュメルの都市国家に遡る古代メソポタミア文明期からモンゴルの軍勢に滅ぼされる紀元13世紀まで、3千数百年に及ぶ歴史を持つ。ハランは古代メソポタミア文明期には、月神 *Sîn* の宗教センターとして有名であり、イスラーム期には「サービア教徒の都市」*madīna al-Šābiya* として知られていた。ハランのサービア教徒は星辰崇拜と偶像崇拜を特徴とする人々であったと思われる。

ハランのサービア教理解に資するものとして10世紀バグダードの書誌学者イブン・アン＝ナディーム *Ibn al-Nadīm* (990頃没) のアラビア語で書かれた『目録の書』*al-Fihrist* (987/8完成) とイブン・ワフシーヤ *Ibn Waḥshīya* が古代シリア語よりアラビア語に翻訳したとされる『ナバテアの農業』*al-Filāḥa al-Nabaṭīya* (10世紀) 等がある。『目録の書』第9章にはハランのサービア教徒の祭暦と神々について記されており、その中にタンムーズ *Tammūz* と呼ばれる神がいる。タンムーズはシュメル語ではドゥムジ *Dumuzi*、アッカド語ではドゥウーズ *Du'ūzu* と呼ばれ、牧夫であり、大地の豊饒や穀物と関わる性格を持つ神であった。神話によればこの神は、愛と豊饒、戦闘の女神イナンナーイシュタルの身代わりとなって死んだとされる。シュメルの時代からこの神の死を泣哭して嘆く儀式が毎年行われており、本発表ではハランのサービア教理解の一端として、古代メソポタミア

起源のドゥムジータンムズ神がイスラーム期のハランにおいてどのように祀られていたかを追跡する。

『目録の書』第9章には、シリア暦第4月のタンムズ月に女たちが穀物霊としてのタンムズ神の死を嘆く、おそらくは収穫祭の記事がある。それは千数百年の幅があるにもかかわらず、新アッシリア期（前911-609）の祭儀注釈書のドゥムジのための儀礼と内容が酷似している。また『目録の書』の記事は、古代神話の名残を示すかのように、タンムズ神の牧夫としての性格、イナンナーイシュタルの破壊的側面を暗示する。しかしながら『ナバテアの農業』にはタンムズ神の死を世界中の7惑星の偶像が嘆くこと、この神は穀物霊でも牧夫でもなく、星辰崇拜を説いたために死したことが記されている。

このようなことから、ハランにおいてタンムズ神は古代メソポタミア文明期の性格を残す形の儀式で祀られながらも、新たな解釈と性格を付与されてイスラーム期に生き延びていたと思われる。他の古代メソポタミア起源の神々にも、多かれ少なかれ同様のことが起こっていたと推測される。

4. 新アッシリア帝国の拠点都市の周辺景観：ヤシン・テベ考古学プロジェクトからの考察

西山 伸一・渡部 展也

西アジアの古代都市についてはさまざまな考古学研究が行われてきたが、その周辺景観の復元に関する研究はまだ途上にある。1960年代以降、セトルメント・パターン研究は、都市とその周辺に広がる村落の空間の存在を明確にした。1990年代からは、衛星画像の解析を利用した都市空間の分析とホローウェイ（hollow way）などの都市間をつなぐ交通路や水路の検証、および遺跡周辺のOff-site surveyなどが、都市周辺の景観考古学的分析に大きな貢献をしてきた。

しかし、新アッシリア帝国（前10～7世紀）の都市とその周辺景観については、いまだ研究が乏しい状況である。本発表では、イラク共和国クルディスタン地域南部に位置する大型都市遺跡ヤシン・テベの考古学調査の成果から都市とその周辺の景観を分析した最新成果とその手法について考察した。

ヤシン・テベは、新アッシリア帝国の東部辺境に位置する拠点都市と考えられ、近年の考古学調査でもアッシリア文化との強い結びつきを占めず発見が相次いでおり、帝国の拠点都市であった可能性が高まっている。また都市の規模は、40ヘクタールを測り、ザグロス山脈西山麓では有数の都市であったことは確実である。その周辺景観がどのような状況であったのかは、他の拠点都市の形成過程や国内での都市の機能を考える上で重要である。

発表の前半では、2018年の予備的考古学踏査（約3キロメートル四方）による成果について報告し、周辺にはテル型遺跡以外の遺跡が存在する可能性について指摘した。踏査の結果、ヤシン・テベの直近には1ヘクタール未満の小さな集落が複数存在することや、さらに少し遠方には2ヘクタール未満の集落が複数存在することがわかった。しかし、水路、交通路などについてはいまだ確証が得られておらず将来の重要課題とした。

後半では、リモートセンシングの分析から見た都市景観について考察した。2019年に実施したコロナ衛星画像を利用した地理考古学踏査により、ヤシン・テベ周辺には確実に幾つか遺跡が分布することが明らかになった。さらに、遺跡周辺の高分解能衛星画像やAW3D画像の分析から、周辺には、さらなる遺跡の分布、および「水門」（あるいは橋脚）のような新たな施設が存在する可能性が指摘できた。これらの情報をもとに、将来的に現地においてより広範囲にUAVデータを収集するとともに、考古学踏査や試掘調査を実施することで、周辺景観の復元に貢献できると考える。

5. ブロークン・オペリスクの王：アッシュル・ベール・カラカ、ティグラトピレセル一世か 柴田 大輔

1853年、ホルムズ・ラッサムはニネヴェにおいてアッシリア王のオペリスクの頭部断片を発見した。現在は、大英博物館に登録番号BM 118898として保管されるこのオペリスク断片は、ブロークン・オペリスクの名で知られ、そこに刻まれた碑文はアッシリア史研究における重要史料の一つに数えられている。ブロークン・オペ

リスクの碑文にはこれを作成したアッシリア王の名が残っていないため、20世紀の中頃までは、オベリスクの王の正体をめぐり諸説が唱えられた。しかし、1930/31年にエルンスト・ワイドナー（1930-31, esp. 88-94）、さらに1961年にリークレ・ボルガー（1961, 133-142）がこれをアッシュル・ベール・カラ（1073-1056）の碑文と同定した後は、この説がいわば定説になり、例えばカーク・グレイソンのアッシリア碑文校訂もこの説を採用している（Grayson 1991 [RIMA 2], A.0.89.7）。しかし、最近になってピーケ・マヒューは前二千年紀後半のアッシリアの暦に関するその論文の中で、ブローケン・オベリスクをティグラトピレセル一世（ca. 1114-1076）の碑文とする大胆な仮説を提案した（2018, esp. 78-86）。この仮説は非常に興味深い一方で、マヒューは論点を十分には検討しておらず、関連する史料も渉猟していないうえ、その説には明らかな誤謬も含まれる。そこで本発表はボルガー説の論拠をもう一度整理し、その後に発見された新史料も含む関連史料を精査することによって、ブローケン・オベリスクの王の正体についてもう一度検証する。主な論点は、ブローケン・オベリスクに言及される紀年職（*līmu*）、アッシリア暦とバビロニア暦の関係、異なる碑文の間で共有されている文言である。その結果、ボルガーの研究の後に発見された新史料を含めて検討すると、確かにティグラトピレセル一世に碑文が帰属する妥当性の方が高いことが明らかになる。最後に、ブローケン・オベリスクの情報を他の史料と付き合わせることによって、ティグラトピレセル一世の治世末期における政治史を再構成する。

参考文献

- Borger, R. 1961: *Einleitung in die assyrischen Königsinschriften. Erster Teil. Das zweite Jahrtausend v. Chr.*, HdO Erg. 5.1.1, Brill.
- Grayson, A. K. 1991: *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC, I (1114-859 BC)*, University of Toronto Press.
- Mahieu, B. 2018: “The Old and Middle Assyrian Calendars, and the Adoption of the Babylonian Calendar by Tiglath-pileser I (attested in the *Doppeldatierungen* and in the Broken Obelisk),” *SAAB* 24, 63-95.
- Weidner, E. F. 1930-31: “Die Annalen des Königs Aššurbêlkala von Assyrien,” *AfO* 6, 75-94.

6. 被征服民のアッシリア帝国への帰属をめぐり一考察

山田 重郎

アッシリアの領土拡大にともなう被征服民の大量捕囚・再定住政策の目的については、二つの対立する見解が示されてきた。すなわち、再定住政策の目的は、国家全体に単一のアイデンティティを持った「アッシリア人」集団を作り出すことにあった、という見解と、複数の異なるアイデンティティを持つ住民たちを競合させることで、彼らの新しい環境における拠り所たる王への忠誠心を高めることにあった、という見解である。また、アッシリア人は、被征服民を、宗教、言語、社会的慣習などにおいて、文化的にアッシリア人に同化する政策をとったのか否かも議論されてきた。

この発表では、こうした論点に留意しながら、被征服民の吸収と国家統一を象徴する王碑文中に現れる表現を検討する。すなわち *ana nišī mātiya manû* 「(被征服民を) 我が国の人民に数える」、*itti nišī māt Aššur manû* 「アッシリアの人々とともに数える」、*kī ša Aššurī emēdu* 「(被征服民に) アッシリア人に対してと同様に(貢納と労働の義務を) 課す」、といった表現である。こうした表現が王碑文においてどのような文脈で現れるのか(あるいは現れないのか)を通時的に分析し、それがアッシリア帝国の形成過程において変化していったアッシリア王の政治思想的関心と帝国経営の施策をどのように反映しているのかを考察する。また、これらの表現は、アッシリア帝国の住民のどのような均一性・統一性を問題としているのかを、行政文書中に現れる「アッシリア人 (*Aššurāyu, Aššurī, mar'a māt Aššur*)」という表現の用法と比較して、考察する。

上記の一連の分析を通して、以下の結論が導かれる：(1) 王室碑文に現れる「我が国の住民(／アッシリアの人々)に(／とともに)数える」という表現は、「州行政システムの中で統治されるアッシリア固有領土内の住民」

としての編入、という政治的・行政的レベルの国家統合を意図しており、言語や文化の分野に及ぶ被征服民の同化を問題にしていない。(2) こうした表現の変化と消失の過程は、従来の「アッシュルの地」から、より広い「大アッシリア」としての帝国行政圏の確立、そして帝国拡張の限界への到達、という国家規模・構造の変容とそれにとまなう王の国家観の変化に対応していたと考えられる。

7. 紀元前1千年紀バビロニアの都市民の家族における女性の役割

渡井 葉子

本発表は、紀元前7世紀末から紀元前5世紀初頭におけるバビロニアにおいて、都市に居住するいわゆる「私的企業家」と呼ばれる家の経済や活動に、女性がどのような立場で関わり、家族の経済にどのような影響を与えたのかについて考察することを目的とする。

第一に、結婚に際して妻の実家から夫の家に贈られる（ただし実際には女性が所有権を持つ、女性の相続財産といえる）嫁資 *nudunnû* について検討する。エギビ家の場合、妻の嫁資は完全に夫および夫の家のビジネス資金として期待された。とくに第4代当主の妻の場合、夫は妻の嫁資の金銀と引き換えに、奴隷と耕地を妻に「売って」いる。これは妻所有の金銀を、売買という形で夫が自分の所有にしたと解釈できる。こうした夫婦間の同様の「売買」は、別の家に属する夫婦の間でもみられる。この結婚は嫁資を目的としたものではなかったと思われるが、夫は妻に嫁資に含まれるのと同額の銀で奴隷を売っており、妻の嫁資（銀）が夫のビジネス資金となったことが分かる。一方で嫁資に含まれる家は、妻の管理の下に残った。自分自身で所有する耕地や銀を管理・運用し、夫とはある程度「別財布」であった女性たちの存在もまた証明できる。この場合、嫁資は夫や夫の家のビジネス資金としてそれほど期待されていなかったようだ。このように、結婚時の妻の持参金（銀）は、夫（の家）にとって重要なビジネス資金となりえたが、その重要度は家によって違い、妻の財産の管理・運用の裁量権の度合いも家や個人によって違っていた、といえる。

第二に、結婚したのち、女性は夫や家の経済活動にどのような形で関与したのだろうか。エギビ家の3代目当主の妻は、夫の奴隷を織物職人の見習いとする契約を結んでいる。また、ある女性がおそらく食材や織物などに支払う銀を家計から受け取っていることを示すと思われる取支簿がある。さらに、夫のビジネス活動に積極的に関与している女性たちもいた。このように、結婚後の女性たちは、一家の主婦として家の中のこと（とくに衣・食に関わる部分）を取り仕切っていたと思われ、また夫のビジネスに積極的に関与する場合もあった。

以上から、ある程度の富裕層に属する家の女性たちが家庭内で置かれていた立場・状況および果たした役割は、夫の家や女性の実家の状況などによって多様なものであったといえる。

8. ヒッタイトの祭儀における神々に近づく際の所作についての一考察

山本 孟

本発表では、前2千年紀アナトリアのヒッタイト王国の祭儀で行われた、頭を下げることと跪くことを組み合わせた儀礼行為について考察した。ヒッタイト語楔形文字粘土板文書の中では、祭の行程を記した文書や儀礼文書などにおいて、王や王族、あるいは神官が、神殿などで頭を下げ、跪くという行為に言及されることがある。本発表では、それらの儀礼行為がどのような場面で行われたのかを整理した。具体的には、行為者と行為の回数、それらが行われる神殿施設に着目して、組み合わせられた一連の動作の意義を理解することを目指した。

嵐の神の神殿における祭儀と都市アリンナで行われた祭儀を記録した文書からは、王が神殿に入るとき、特に神殿入り口の階段を登る際に、頭を下げ、跪いてから、もう一度頭を下げていることがわかる。また、「雷の嵐の神」の祭では、王が神殿内の建物に設置された「窓」に対して、頭を下げ、跪き、もう一度頭を下げている。この三段階の儀礼行為は、神殿あるいはその内部の建物に入り、そこで段差を一段登るか、一歩前に前進して、神々に近づく際に行われたと考えられる。他のいくつかの祭儀文書からは、王だけでなく、王妃や王子、神官によっても、祭の中で神殿に入る際に神々の前で頭を下げたから跪くという行為が行われたことがわかる。また、神殿とは異なり、死した王の供養にかかわる ^{NA4}*huwašī-* と呼ばれる碑を伴った野外の聖域での祭儀の記録では、この施

設に入る際、王が二礼するも、跪かないことがあったことがわかる。

頭を下げることと跪くことは、人が神殿の建物に入り、神前に来るとき、神に敬意と服従を表すために行われた儀礼行為であった。頭を下げることは、神殿の施設に入って神の像に向かい合うときの基本動作であり、続いて行われる跪く行為は、神への服従を示す、より強い敬意の表れであった。そして最後にもう一礼することは、一段高いところへ登るなど、神に対して一歩近づいたときに、再度敬意を表すために行われたものと考えられる。また、神殿以外の施設では、王による儀礼行為の方法も、神殿の神々に近づく際の場合とは異なっていたと考えられる。

第4部会

1. 聖書ヘブライ語の不規則変化名詞に見られるセゴル型の痕跡：名詞の語幹交替を踏まえた新しい分類方法の提案

高橋 洋成

聖書ヘブライ語のセゴル型名詞類とはCVCC語幹のものを指す。接尾辞を持つときはそのままだが（例 *malk-i* 「私の王」）、接尾辞を持たないときは語末の子音連続を避けるために母音 *e*（セゴル）を挿入する（例 **malk > mēlek* 「王」）。セゴル型の名詞類はまた、単数形CVCC- ~ 複数形CVCaC- の語幹交替が生じる。たとえば、「王」は単数形 *mēlek* ~ 複数形 *mlōkim* となるが、これは音韻論的に */*malāk/ ~ /*mälāk-i:m/* と推定できる。

なおここで、推定音韻形には弱アクセント表記を採用した。弱アクセントの置かれた弱母音 */*ä/* は中央化して *ə* になり、音質的に */*ö/* との区別を失う。また、最弱母音 */*ä/* は完全に中央化し、シユワ化 (*a*) するか脱落する。弱アクセント表記は聖書ヘブライ語の音韻形の議論に効果的である。

さて、セゴル型の特徴である「単数形と複数形の語幹交替」に着目すると、伝統的に不規則変化とされてきた名詞類の中に、セゴル型に再分類できるものがあると判明した。以下に例と手順を示す。(1) 従来CīC型とされてきた *šir* 「町」（複数形 *širim*）だが、士師記10:4に複数形の異形 *šyrim* が見られる。この異形をセゴル型の複数形 */*šiyār-i:m/* と見なせば、単数形 */*šiyr/* を導出できる。ゆえに *šir* はセゴル型であり、複数形 *širim* は二次的に形成された可能性が高い。(2) 従来CīC型とされてきた *liš* 「男」（複数形 *lišim*）も、複数形をセゴル型の */*liš-i:m/* と見なせば、単数形 */*liš/* を導出できる。*/*liš/ > /*liš/* を確認できる言語資料は無いが、複数拘束形 (*liše* */*liš-è=*)、女性形 (*lišš* */*liš-ā*) など、語形変化の基底に */*liš/* が位置づけられるのは確かである。(3) 従来CīC型に分類されてきた *ben* 「息子」（複数形 *bonim*）は、セゴル型の語幹交替CV<CC-> ~ CV<CaC->の末尾部分CC- ~ CaC-に着目すると、*/*bn/ ~ /*bān-i:m/* のように当てはめることができる。すなわち、*ben* は起源的にCC語幹のセゴル型と見なしうる。またこのことから、セゴル型の語幹交替の本質は語末の拡張（母音挿入）にあり、 $\sigma_{\geq 0}CC \sim \sigma_{\geq 0}CaC-$ のように定式化できると考えられる。

2. ヘブライ語聖書における「レファイム（死者）」と死者儀礼

新井 雅貴

KTU 1.161は、先王ニクマドの埋葬式とその王位を継承する新王安ムラビの即位式を扱うウガリトの儀礼文書である（Pitard 1978; Pardee 2002）。この儀礼において「ラパウマ (*rapāuma*)」は冥界から儀礼の場である墓に呼び出され、供物を捧げられる。ウガリト王家の祖先を指す語であることが伺えた。また、そこには王家の系譜を示し、継承される王位の正当性を主張する目的があった。つまり、ラパウマは王家の祖先として王権を保障する権能をもつ死者であるといえる。加えて、太陽神がラパウマを冥界に連れ戻すことから、ラパウマは太陽神の支配下にあることが確認できた。

その一方で、ウガリト語のラパウマと同語根が想定されるヘブライ語「レファイム (*repāim*)」は神に対立する無力な死者として描かれる。イザヤ書14章のバビロン王がレファイムと共に弱くなるという主張 (*hullētā kāmônū*) および「地の英雄達 (*attūdē āreš*)」や「異邦人の王達 (*malkē gōyim*)」へのレファイムの言い換えから、レファイムはイスラエル以外の王家を指す語であると理解できる。また、箴言2編と9編はレファイムとの交流

がヤハウエ崇拝と相反する行為であることを警告する文脈であり、そこではレファイムが儀礼の対象となり得る死者である点が示唆されている。

このようなヘブライ語聖書の見解に従えば、レファイムの語根をラパウマと同じ *r-p-*「癒す」ではなく、*r-p-h*「沈む」の意味で理解する方が妥当であるようにもみえる (De Moor 1976; Hays 2011)。だが、ヘブライ語聖書の描写は古代オリエント世界で一般的に死者が生者を保護する力をもつと考えられてきたことを前提とした上で、あえて *r-p-h* を連想させ、無力という印象を読み手に抱かせるためのものである。

すなわち、ラパウマとレファイムの最大の違いは自国の死者かどうかという点にある。特に、レファイムが他国の王家を指すというヘブライ語聖書の主張は、イスラエルにおけるレファイムに対する儀礼の重要性を排除し、かつレファイムがヤハウエと対立する存在であることを強調するものである。このようにして、ヘブライ語聖書は死者の存在そのものを否定することなく死者儀礼を批判し、崇拝対象をヤハウエ神に限定することの正当性を裏付けようとしたと結論付けられる。

3. アラビア語の名詞文の主語の限定性と特定性

榮谷 温子

正則アラビア語において、通常、名詞文の主語 (mubtada') は限定でなければならないが、非限定名詞句であっても、特定化 (taḥṣīṣ) されている場合および一般化 (ta'mīm) されている場合には、それも名詞文の主語となりうる。特定化 (taḥṣīṣ) は、1. 形容詞による修飾、および2. 非限定名詞を用いたイダーファ、の2種類に大別できる。しかし、taḥṣīṣ という用語は、アラビア語文法学の初期には、文法用語としてはまだ使われていなかった用語である。Sartori (2018) によれば、この *ḥ-ṣ-ṣ* という語根を文法用語として用いたのは、Ibn Sarrāj (d. 316/928) で、ʾUṣūl fī al-Naḥw において maḥṣūṣ bi-l-madh/bi-l-damm (賞賛/非難による特定) として、非限定名詞によるイダーファを記述した。他方、形容詞による修飾については、al-Sīrāfī (d. 368/979) が Šarḥ Kitāb Sībawayhi の形容詞の章で、iḥtiṣāṣ および ʾaḥaṣṣ という語を用いてそれを説明している。ḥaṣṣa という第2形の動詞が初めて用いられたのは、ʾAbū l-Ḥasan al-Rummānī (d. 384/994) の Šarḥ Kitāb Sībawayhi においてであった。さらに、al-Zamaḥṣārī (d. 538/1144) は al-Mufaṣṣal において、限定化 (ta'rīf) と特定化 (taḥṣīṣ) の区別をしている。

他方、一般化は、1. 名詞文の主語そのものが、kull (すべて) のような一般の形式であるか、2. 否定の文脈 (「その館の中に男はいない」など) によって実現される。しかし、Ibn Yaʿīṣ (d. 643/1246) の、Šarḥ al-Mufaṣṣal における「非限定が、一般の意味 (ma'nā al-'umūm) を含んだとき」の記述などを検討すると、総称指示と不特定指示を混同している節がある。両者の混同は、種を表す固有名詞 ('alam jinsī) が限定名詞句であるかどうかの議論にも見られたものである。今後は、ta'mīm という用語の変遷に関する調査を行い、ta'mīm と jins (種) の概念の関係、さらには ta'mīm と ta'rīf の関係を明らかにしていくことが課題である。

4. 現代アラビア語の標準化とクルアーン読誦学における流派間競争：ハフス流派の優勢化について

竹田 敏之

読誦流派については、イスラーム諸学の発展の中で7あるいは10の流派を正統とするコンセンサスが成立している。しかし、オスマン朝後期にハフス伝承のアースィム読誦 (以下、ハフス流派) が域内の公式的な流派として広まり、その後1923年にエジプトでクルアーンの刊本 (いわゆる「ファード版」) および改訂版 (1952年) が登場すると、その普及によってハフス流派の優勢化はイスラーム世界で一気に加速した。その他の流派は、現代ではオスマン朝による政治的・法学的影響が少なかったマグリブ地域や西アフリカ (ワルシュ流派、およびカールーン流派)、スーダンおよびイエメンの一部 (ドゥーリー流派) などに留まっている。

イスラーム諸学の史的展開から言えば、ハフス流派は長らく読誦流派の主流ではなかった。例えば、ザマフシャリー (1144没) やクルトゥビー (1273没)、スューティー (1505没) などの啓典解釈書はどれもハフス以外の読

誦流派に依っている。また、誦誦7流派に関する韻文要綱、通称『シャーティビーヤ』もカールーン流派を主軸に編まれたものである。

ところが、ワルシュ流派を採用したマグリブや、カールーン流派が優勢なチュニジアやリビアなどを含む「アラブ世界」の国語／共通語として成立した現代アラビア語は、音韻や発音の面でハフス流派の特徴が顕著であり、他の誦誦流派の影響はほとんど見られない。例えばハフス流派以外で頻出するイマラー（a音がi音に傾く現象）や、ハムザ音の脱落およびアリアフ/ワーウ/ヤーへの交替は、学校文法やメディアでは標準的とは見なされていない。またワルシュ流派の特徴であるナクル（ハムザの母音がその前の子音に移行する現象）も、現代アラビア語には反映されていない。

本発表では、こうした誦誦学の諸規則を整理し、近代以降の文法書（タフターウィー著『アラビア語宝典』など）における関連事項の記述と比較することで、ハフス以外の誦誦流派が有する特徴が学校文法の成立過程で削除されてきたこと（あるいは採用されなかったこと）、そしてクルアーンの刊本や音声メディアの流通と並行しながら現代アラビア語がハフス流派の規範に即した形で標準化されてきたことを明らかにした。結果として、現代アラビア語が「正しさ」の根拠とするクルアーンとはハフス流派を基調としたものであり、またその規範は、他の誦誦流派やアラブ諸部族の方言的特徴を正用法として積極的に採用していた古典期の“フスハー”とは明らかに異なっている点を指摘した。

5. ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞は本当に形容詞か

五十嵐小優粒

“havā ālūde šod（大気が汚染された）”の“ālūde（汚染された）”は他動詞“ālūdan（汚染する）”の過去分詞なのか、これと同形の形容詞なのか。辞書には2つの品詞が記載されており、「他動詞の過去分詞＋šodan」という原形の受身形に加え、「名詞／形容詞＋šodan」という周延的な構造も存在するため、双方の可能性がある。本発表では、この問いに対して2つの判断基準を立てて考察した。

本研究では、ペルシア語における動詞の過去分詞と同形の形容詞を考察対象とした。まず、黒柳（1996）に記載のある95個に、Dabīr-Moqaddam（1988）から27個を追加し、計122個の形容詞についてペルシア語母語話者の協力を仰いで調査を行なった。

「形容詞らしさ」をはかる1つの基準として、名詞を修飾するという役割から、「名詞＋エザーフェ＋形容詞」（例：āb-e čekīde＝滴る水）という形式が成り立つかを調べた。その結果、これを満たす形容詞は122個中77個であり、満たさない形容詞45個（例：*āb-e rīxte（注がれる水））のうち、32個が他動詞由来の形容詞であった。この理由として、形容詞にšodanを付けた周延的な受身形の方が自然な表現であり、「名詞＋エザーフェ＋形容詞」よりも「形容詞＋動詞」もしくは受身形としての用法がペルシア語母語話者に定着していると考えられる。

本発表ではさらにもう1つ、“kardan（～する）”を付けて複合動詞になれるか否かという基準を提言した。このkardanは、「名詞や形容詞を伴って、複合動詞になる」もので“ālūde kardan（汚染する）”は成立する。この基準を満たす形容詞は36個で、86個の形容詞は複合動詞になれないことが判明した。例えば“*košte kardan（殺害する）”や、“*nevešte kardan（記述する）”は成立しない。この理由として、「*殺すことをする」のように意味の重複が考えられることと、瞬間動詞に由来する一回性の動作を表わす形容詞がkardanと共に起らないことが分かった。だが、“košte”も“nevešte”も多くの辞書に形容詞として記されている。これらを真に形容詞であるとするならば、記述文法において、上述したようなペルシア語の形容詞の特徴を追記しておくことが求められよう。

ālūdeのような語を動詞の過去分詞か形容詞か断定するのは困難でありその意義も見出せない。重要なことはこれらの形容詞には動詞としての性格を色濃く残しているものと、形容詞の特徴を有しているものとの段階性が存在するという点である。

6. コプト語の母音音素目録の再整理：コイナー・ギリシア語およびアラビア語との言語接触と古代エジプト語史の観点から 宮川 創

本発表では宮川（2018）で支持した、コプト文字エータとオメガがエプシロンとオミクロンに対してそれぞれ開口度が狭く、母音字重複は長母音を表すという説について、更なる検証を加え、コプト語サイド方言の母音音素目録を再整理する。コプト語学の従来の説では、エータがエプシロンに対してオメガがオミクロンに対して長母音であり、コプト語以前のエジプト語における声門閉鎖音および有声咽頭摩擦音を表す子音字との対応から、母音字重複は母音と声門閉鎖音を表すという説明がなされてきた。これに対し、Kuentz（1934）が提唱し、Greenberg（1962）が補強した説では、エータとオメガはエプシロンとオミクロンよりも開口度が狭い母音で長短の区別はなく、母音字重複こそが長母音を表すとされる。宮川（2018）では、Kuentz - Greenberg説を支持する結果を提示し発展させたが、強勢位置に関する観点が欠如し、データも限られていた。本発表では、この説を強化する新たな証拠をコイナー・ギリシア語およびアラビア語からの借用語とコプト語以前の古代エジプト語から示す。強勢音節と非強勢音節で現れる母音字が限定されているため、強勢位置についても考慮に入れる。こうして新たな証拠で補強したエータ・オメガ開口度説と母音字重複長母音説、および、強勢・非強勢音節の母音字分布の対立を基に、コプト語サイド方言の母音音素目録を整理し、より合理的で新しい母音体系を提示する。

参考文献

- Greenberg, Joseph Harold 1962: "The interpretation of the Coptic vowel system," *Journal of African Languages* 1, 22-29.
- Kuentz, Charles 1934: "Quantité ou timbre? A propos des pseudo-redoublements de voyelles en copte," in *Comptes rendus du groupe linguistique d'études chamito-semitiques*, Paris: Geuthner, vol. 2, 5-7.
- 宮川創 2018: 「コプト・エジプト語サイド方言における母音体系と母音字の重複の音価：白修道院院長・アトリベのシェヌーテによる『第六カノン』の写本をもとに」『言語記述論集』9, 173-188.

7. クルド語クルマンジー方言の無接続詞文 村上 武則

本発表ではクルド語クルマンジー方言において接続詞が使われていないにもかかわらず複数の要素が文を構成している現象について報告した。まず問題提起として接続詞の有無による認識の違いの現れ方や接続詞がどのように生まれてくるかについて論じ、世界の言語の逆接の接続詞を意味と語源と統語的役割に従って引き算型、余剰肯定型、焦点化型、関係詞型、機能分化型、借用型に分類した。クルド語クルマンジー方言は余剰肯定型と焦点化型の組み合わせであり、現代バルシア語は借用型に当たる。接続詞の有無がどれだけ文の自然さに結びつくかは言語によって基準が異なり、また無接続詞文に当たる英語の *asyndeton* もギリシア語文法学の用語できわめて文章語の修辞技巧が発達している言語から見た一定の偏見を含んでいることを断った上で、クルド語クルマンジー方言において発表者が特異であると考えた無接続詞文の例について検討した。まず「来たけれど会えなかった」のように時系列順に起きた出来事や「勉強したのに試験に落ちた」のように想定された因果関係が結びつかず期待が裏切られたことを逆接関係として表示せず等位接続詞すらも現れない現象について扱い、一方で「勉強していないのに受かった」のような想定外の事態については接続詞が現れることを述べた。次に「良いがこの点がダメ」のように全体的な主張を認めた上で部分的にそれに相反する内容を例外として述べる文では無接続詞文にはならないことに言及した。さらに「行って遊ぶ」のように日本語のテ形やトルコ語の副動詞を使って表される文はクルド語クルマンジー方言では接続詞を伴わない動詞の連続となって現れることが多く、その場合に語順の制約があり2つの動詞が補語を共有していると見られることを構文上の特徴として挙げた。また、トルコ語とクルド語の双方向翻訳により「勉強したのに試験に落ちた」のような文では「行って遊ぶ」と同じ副動詞を使ってトルコ語に翻訳することは出来ず逆接の接続詞を使った複文になることを指摘し、トルコ語の副動詞文とクルド

語の無接続詞文が必ずしも対応しないケースが存在することを確認した。最後に中期イラン語のパフラヴィー語とバクトリア語の無接続詞文の例を引用し、クルド語の無接続詞文がトルコ語との言語接触由来ではなくイラン諸語にある程度共通して観察される現象の一環であることを主張した。

第5部会

1. イブン・アラビーの信仰論と「神の変容」のハディース

相楽 悠太

イブン・アラビー（1240年没）の神秘主義的聖典解釈に関する従来の研究では、彼の思想に対するクルアーンの影響が議論されたが、彼によるハディースの利用は、一部の神聖ハディースを除きあまり注目されない。スーフィーたちが引用するハディースには、ハディース学の見地からは確実性が認められないものも多い。これに対し、イブン・アラビーが最も好んで引用したハディースの一つに、アブー・サイード・フドリーらが伝え、ムスリムとブハーリーの『真正集』に収録された、復活の日の見神について述べたハディースがある。本発表では『マッカ開扉』や『叡智の台座』などの著作の中でこのハディースに言及したイブン・アラビーの議論を検討し、彼によるこのハディースの利用の仕方や解釈の内容を分析することで、このハディース本文の内容が彼の思想の中に有機的に位置づけられていることを明らかにした。

復活の日の人類の集合から彼らが来世に入るまでの情景を物語る上記のハディースのうち、来世に入る前の信徒たちに対し神が複数の姿をとって現れる一場面イブン・アラビーはとくに注目する。そのとき最初に現れた神の姿を信徒たちは拒絶し、神であることが彼らに分かるような別の姿に神が「変容」とハディースは伝える。この「神の変容」を現世と来世を通じた絶え間ない神の顕現の原理を示すものとして解釈することで、イブン・アラビーはこのハディースの意味をその終末論的文脈から切り離す。そして、ハディース中で神の顕現を目の当たりにした人々が神の特定の姿のみを神と認めることに基づき、人間は自身の信仰によって無限なる神を限定するのだと説く「信仰によって創られた神」という独特の概念を提示する。さらに、自らの限定的な信仰から神を解き放つ者は、神の多様な顕現のあらゆる姿を一なる神の変容としてみることができると述べ、この境地を「真知者」の理想的な信仰のあり方として描く。

このようにイブン・アラビーの信仰論は「神の変容」のハディース本文の内容と緊密に連動しつつ展開される。ハディース学的権威づけのもと一般信徒に聖典として共有されていたハディースを用いることで、イブン・アラビーは自身の信仰論を神秘主義の伝統のうちに閉ざされたものではなく、全信徒にとって切実な問題として提起しようとしたのだと考えられる。

2. 十二イマーム派による初期のキリスト教史理解：同派伝承中のペトロ・パウロ観をもとに

平野 貴大

本発表は、初期のキリスト教の2人の聖人ペトロとパウロに関する十二イマーム派伝承を分析し、同派におけるペトロとパウロの評価の差を明らかにする。この分析を通じて、同派のキリスト教史理解の一端を明らかにする。ペトロはイエス・キリストの十二使徒の1人であり、パウロはペトロと同時代の人物で、新約聖書の一部が彼に帰されている。イスラームのクルアーン解釈、ハディースにおいては、預言者イエス（イーサー）に関する物語の中で彼らについての言及が為される。とりわけ十二イマーム派の伝承集やクルアーン解釈においては、ペトロとパウロは以下のような対照的な位置付けが為されている。

ペトロについては、十二イマーム派伝承中で度々彼の功績が言及されている。同派伝承におけるペトロについての重要性は以下の5つの点にまとめられよう。それらは(1)ペトロはイエスのワシー（遺言執行人）、(2)ペトロの宗派のみの救済、(3)後継者指名、(4)ペトロの奇跡、(5)イマームたちの祖先としてのペトロ、の5つである。ここから、同派が預言者イエスの後継者ペトロと預言者ムハンマドの後継者たるアリーの類似性を主張していたことがわかる。

それに対して、パウロについては、十二イマーム派伝承において彼への言及はほとんどなく、パウロに言及す

る数少ない伝承の中には肯定的なものではなく「キリスト教の開祖」としての否定的な評価が与えられていると言える。

以上の十二イマーム派のペトロ観・パウロ観には次のような背景があるだろう。ペトロに関する記述は、同派のイマーム論の過去の物語への投影の例であると考えられる。同派伝承においてペトロにはアリー同様の「イマーム」同様として権威づけが成されていた。ここから、同派ではキリスト教のイエスの宗教としての正の側面がペトロに帰されていると言える。それに対して、パウロについての記述には、イスラームから見たキリスト教の「逸脱性」が関係している。イスラームの自己認識では神はイエスを通じて一神教を広めたが、イエスの後の時代のキリスト教徒がイエスの教えを歪曲したため、預言者ムハンマドを通じて宗教を完成させたとされる。イスラーム思想の中ではイエス以降のキリスト教の逸脱の起源がパウロに帰されていると考えられる。

3. フルーフィー教団における所謂「神の時代」について

角田 哲朗

フルーフィー教団 (Ḥurūfiyya) とは、ファドルッラー・アスタラーバーディーが創始した千年王国主義的なセクトである。文字と数に着目して独自の教説を展開したファドルッラーは、1394年にティムール朝当局に処刑されるも、その後も教団員らは精力的な著述活動を継続し、ファドルッラーは「神」と称揚されるまでに至った。

本報告では、ファドルッラーの直弟子のサイイド・イスハークの『親愛の書』と『土の書』に描かれた時間論を手掛かりに、創始者亡き後の教団内におけるファドルッラーの位置づけを考察した。サイイド・イスハークによれば、被造世界の歴史は①アダムに始まりムハンマドに封印されるまでの「預言者の時代」；②アリーに始まりファドルッラーに封印される「聖者の時代」；③その後に来る「神の時代」に分割される。また、こうした時代区分に基づく「直線的」な時間と平行する形で「円環的」な時間のモデルも提示されており、それに従えば、世界は「始まり」から「終わり」までをひとつの「周期」として、同一事象が発生する数百万回もの「周期」が「円を描くかの如くに」反復される。

本報告の考察によって得られた知見は次の通りである。①時の「円環モデル」に即した場合、ファドルッラーは1360年で満了する周期の終わりに再顕現するアダムと見做される。この文脈におけるアダムとは、クルアーンに描かれた通りにあらゆる名（これをフルーフィー教団は神の言葉を構成する32音素=32種のペルシア文字と諒解する）を教わった完全人間を意図している。また、こうしたアダムの再顕現は時の円環構造と円の軌跡との相似性によって自明とされる。②時の「直線モデル」に即した場合、「神の時代」の開始者たるファドルッラーは聖者かつ「神性顕現の場」(mazhar-i ulūhiyyat) と見做される。ところがサイイド・イスハークによれば、「神の時代」には神は万人に顕現するという。これらを踏まえて整合的に解釈するならば、次のようになる。神は「神の時代」に万人を顕現の場として顕現するので、ファドルッラーに限らず万人は神格化される潜在性を秘めている。ところが、そうした真理に到達したのはファドルッラーに限られるため、「人即ち神」という構造の象徴としてファドルッラーは信奉者たちに神として扱われることになった。この仮説については、他の教団員の著作を通じた実証が課題となる。

4. 20世紀半ばのコプト正教会における聖メナス崇敬の復興

三代川 寛子

聖メナスとは、4世紀に殉教したエジプト出身の聖人である。殉教後アレクサンドリアの近郊の砂漠に埋葬されたが、その墓周辺に湧く泉が治癒の奇跡を起こすとされ、多くの巡礼者を集めた。7世紀以降は巡礼路が閉ざされたため、やがて聖メナスの巡礼都市は放棄された。以後も聖メナスはコプト正教会で崇敬されてきたが、数多く存在する聖人の一人であり、現在ほど人気や知名度のある聖人ではなかった。

後にコプト正教会の総主教キリルス6世となるアーズィル・アッター (1902-1971年、修道士としての名はミーナー) は、聖メナス崇敬を習慣とする家に生まれたことから、総主教に選出される前から個人的に聖メナス崇敬を広める努力を重ねていた。一方、第二次世界大戦中の1942年、上述の聖メナスの巡礼都市の遺構 (1905年発掘)

からほど近くのエララメインで戦闘が行われ、連合軍側で戦ったギリシア人兵士たちは、戦闘の最中に聖メナスが現れ連合軍を勝利に導く奇跡が起きたと主張し、アレクサンドリアのギリシア正教会が主導して聖メナスの巡礼都市の遺構に記念として教会を建てようとする動きが起きた。これに対してミーナー司祭（後のキルス6世）は、アレクサンドリアのコプトの若者たちに聖メナス崇敬の復興を勧め、それを受けて1945年に聖メナス・コプト学協会が設立された。この協会は、聖メナスに捧げる教会を建て、その祭壇にアブー・ミーナー遺跡の本物の柱を使用するなど、聖メナス崇敬の復興に向けて活発な活動を行った。同協会は多くの出版物を刊行しており、特に二代目会長ムニール・シュクリーは聖メナスがエジプト出身の聖人であることを強調し、アブー・ミーナーの遺跡をコプト正教会の遺跡として、またアレクサンドリアという街自体も、グレコ・ローマン期のエジプトを代表する街ではなくコプト正教会の揺籃の地として提示した。

20世紀前半頃のエジプトのギリシア系住民は綿花貿易に従事する者が多く、コプト正教徒とは政治経済的利益を異にする集団で、同じエジプトに住むキリスト教徒であっても両者の間の交流は活発ではなかった。1930年代以降徐々に進んだエジプト社会全体の政治的・経済的脱植民地化が、エジプト出身の聖人メナスに対する崇敬の復興を促進したものと考えられる。

5. アル・ビールニーの伝えるインドの太陽崇拜

永井 悠斗

アル・ビールニーは10～11世紀のイスラーム文化圏を代表する学者として名高い。彼が晩年に寄せたインドの文化・思想に対する多大な関心は1030年に大著『インド誌』として結実した。

本発表はこの『インド誌』から太陽崇拜者マガあるいはムルターン市の太陽崇拜に関連する記述を取り上げ、その内容を検討した。特に注目されるのは、①インドに残存するゾロアスター教徒（Majūs）が「マガ」と呼ばれるという彼独自の記述、②太陽神像の信奉者としてマガの名前を挙げるヴァラーハミヒラの『プリハット・サンヒター』からの引用、③他のムスリム著作家の記述とも共通するムルターンの太陽神像に関する記述、④サーンバプラヤートラーというムルターンの祭りへの言及である。

マガ（Skt.Maga）とは『サーンバ・プラーナ』および『バヴィシユヤ・プラーナ』に現れる太陽崇拜を専門とするバラモンで、先行研究では古代イラン宗教に起源を有することが指摘されている。また、ムルターンは上記のプラーナ文献で語られるクリシュナの息子サーンバが建てたとされる太陽寺院とそれが位置していたとされる都市サーンバプラの有力な比定先で、マガの太陽崇拜との関わりが指摘される。

上に挙げた記述は先行するマガ研究において既に個別に利用されているが、本発表ではその記述の全体を対象とすることで、そこに以下のような、従来注意が払われていなかった奇妙な点が見られることを指摘した。

ビールニーは記述③・④からも示唆されるようにマガとの関連が指摘されるムルターンの太陽崇拜を実際に見聞している。また記述①・②によれば、ビールニーはマガが太陽崇拜者であるという知識を持った上で、そのマガをゾロアスター教徒（Majūs）と同一視している。しかし、この同一視は、偶像を用いて太陽神を崇拜するというマガの特徴が今日一般に知られるゾロアスター教徒の有り様とは一致しないため、一見すると奇妙に思われる。

この奇妙さの解釈として、本発表ではビールニーが「Majūs」という語をより漠然とイスラーム以前のイラン人の信仰全般を指す語として用いている可能性と、マガと同様の太陽崇拜を行いつつゾロアスター教徒を自称する集団が存在した可能性の2つを指摘した。また、その検証のために他のムスリム著作家の文献の調査が課題として残された。（本研究は、JSPS 科研費20J10840の助成を受けたものである。）

6. スフラワルディー哲学における強度について

宮島 舜

スフラワルディー哲学において用いられる強度の概念について範疇論の視角からさぐることが発表の趣意である。具体的な論点は次の二点である。ひとつは実体範疇における強度の問題、いまひとつは『照明哲学』の形而上学における強度概念の適用である。

前者については、アリストテレスの『範疇論』において提示され、そののちアラビア語圏の逍遙学派哲学者たちの実体論にも継受された、実体範疇は強度を受け容れないとの立場を確認したうえで、逍遙学派批判者であるスフラワルディーがそれにたいして、逍遙学派的範疇においては可知的領野が閑却されていることへと批判を向け、実体範疇が可感的領野のみならず可知的領野にも同名同義的に言われうると仮設したときに生ずる不都合を指摘することで、実体には強度が許されるはずであることを導出する道ゆきをあとづける。後者については、逍遙学派のものとは大きく手法をかえ、範疇論(範疇の列挙・分類)がそれ自体として論ぜられることのない主著『照明哲学』に、しかしいわゆる逍遙学派的著作において在来の実体論の枠組にそくして行なわれた強度にかんする議論が反映されていることを示すとともに、スフラワルディーがそうした強度の概念ないし思考法に依頼することで自身の「光の形而上学」を展開している事実をあかす。殊にかれの存在論の基底をなすものとして提示される実体／様態・明／暗からなるスフラワルディーの存在論的マトリクスに注思することで、範疇論的実体論と光の存在論とが連絡するはこびが浮彫となる。

本発表は、まずは、アリストテレス『範疇論』受容史および哲学史上の実体範疇をめぐる議論にたいして、相対的にみていまだ研究が進んでいないアラビア語圏における新たな知見をあたえるという意義をもつ。くわえて、スフラワルディー研究の埒内でいっても、かれの光に根ざす哲学がややもすれば神秘主義的にもみえるその外形に反して理論的な基礎のうえに打ち樹てられていることを証する一事例が本発表では提示されることになるが、これは、いまだ不明な点の多い逍遙学派的著作と『照明哲学』とのあいだの連関について考えるうえでの一知見ともなりえよう。

7. オリент文明の高校世界史における今後について：次期学習指導要領とその変化

南澤 武蔵

2022年度より高等学校の学習指導要領が年次進行で実施されていく。今回の改訂において、高校地理歴史の歴史科目は新設の歴史総合(必修)と世界史探究(選択)となる。その結果、これまで全ての高校生が何らかの形で履修していた「高校世界史」は学ばれなくなる。新たな必修科目である歴史総合は、世界史と日本史の近現代史を扱い、歴史的なものの見方や考え方を学ぶ科目とされている。世界史Aは近現代史を中心としつつも、学習指導要領の解説には古代オリент(オリент文明)に関する言及があり、教科書にはメソポタミア文明やエジプト文明が掲載されていた。しかし、歴史総合は学習指導要領に古代オリентに関する言及はなく、教科書から記載がなくなる可能性がある。

世界史探究は単位数が1単位減り、その目的は歴史的なものの見方・考え方の育成が掲げられている。そのため、具体的・個別的な歴史を教え込むよりも、歴史系用語を精選し、概念などを表す語を中心に扱うべきだとされている。新たな世界史用語の試案では、従来は用語集に必ず記されていた固有名詞が教えるべき用語から外されている。また、大学入試センター試験の受験者数は現行の世界史Bにおいても日本史Bの受験者数の6割にも満たないが(令和2年度)、世界史探究では選択者の割合は変わらないか、さらに減ると推測される。世界史Aの廃止により、今後は半数以上の高校生にとっては中学で学んだ古代オリентがすべてとなる。

こうした点からは、高校生がオリент文明に触れる機会は減少し、オリент文明に対する興味・関心を高めるには学校外での機会が益々重要になると指摘できる。しかし、高校の授業でオリент文明を扱うことが出来ないわけではない。教え込みではないからこそ、本報告者が実践してきた、調査隊の協力の下で行った発掘調査中の遺跡をテーマとした生徒の発表やファイアンスの製作体験が今後の高校の授業で求められる一つの形となる。また、歴史総合においても「様々な資料を使って歴史を考えさせる」項目があり、この項目では古代オリентの研究から提供される資料が授業教材になると考える。

現在、今回の改訂を受け、現場の教員は主体的・対話的で深い学びを実現するために有用な資料を探し求めている。古代オリентの研究成果から教材として活用できる資料や情報が発信されれば、オリент文明の授業が展開される機会は増える。

第6部会

1. 近世イランにおける講釈とその周辺：『ハムザ物語』を中心に

近藤 信彰

qesse-khwānī, naqqālī, dāstāngū などと呼ばれた講釈は、預言者の叔父ハムザ（625年没）を主人公とする『ハムザ物語』を中心に、オスマン朝、サファヴィー朝、ムガル朝など近世の社会で非常に流行したことが知られている。昨年、Pasha M. Khanによるインドにおける講釈についての研究書（*The Broken Spell*）が刊行されたが、同じペルシア語文化圏でもイランのそれについては、歴史学的研究は少ない。また、文学研究においては、ペルシア語でそれなりの蓄積があるが、資料の検討が網羅的ではない。本報告では、近世イラン（16～19世紀）の講釈のあり方とその時期による変化を、網羅的な史料の検討により、明らかにした。

まず、講釈の文化・思想的位置づけについて論じた。16世紀初めに著された『フトツワの書』は、講釈師について一節を割いており、イスラーム神秘主義のなかに位置づけられていたことは明らかである。また、17世紀後半にイスファハーンに詠まれた都市住民の諸集団を描写したshahr-āshūbと言われるジャンルの韻文作品には、講釈師についてのそれが含まれており、しかも『ハムザ物語』の登場人物の名を多数おりこんでいる。次に、史料から抽出した16・17世紀の講釈師と王書詠みのリストを提示し、珈琲店などで活躍した両者の関係について論じた。一方で、シーア派ウラマーは『ハムザ物語』を始めとする講釈に対して、厳しい姿勢を取っていたことを彼らの言説を紹介しつつ、指摘した。さらに、19世紀の講釈の状況について説明し、伝統は継承されたが少しずつ周縁化していった傾向にあったことを示した。1922-23年のテヘラン市の統計では講釈師は20名しかおらず、400名近くの殉教語り（rowzekhwān）や100名以上の時宜詩詠み（maddāh）に比べて、圧倒的に少ない。

さらに、大きな変化が生じたのはレザー・シャー期（1926-41）であり、彼の命により、『王書』以外の講釈が珈琲店で禁止されたことによる。『王書』が現代のイランで国民的叙事詩となり、『ハムザ物語』などの多様な作品が忘却されていった背景に、イラン・ナショナリズムの影響を見ることができる。

2. イラン近代史の叙述における時代区分の問題

鈴木 均

本報告では近年刊行されたAbbas Amanatの単独執筆による浩瀚なイラン近現代史の通史*Iran: A Modern History*（Yale Univ. Press, 2017）における時代区分と叙述が提起する問題を中心に据え、イラン史全体の時代区分のあり方について新たな考察を加えようとした。『イラン近代史』と題された同著作において、著者のAbbas Amanatはサファヴィー朝から革命後の現在までを一貫した視点の元に叙述することに挑戦しており、19世紀末以来の立憲主義の導入から20世紀初頭の立憲革命までを近代史の劈頭に位置づけてきた従来のイラン近代史理解に対して深刻な再考を迫るものである。

本報告においては一方でErvand Abrahamian, *Iran between Two Revolutions*（Princeton Univ. Press, 1982）を立憲革命を近代化の画期とする旧来の典型的な叙述として上記アマーナト著作と比較し、また他方で1979年の革命後のイラン国内における歴史認識の一例としてDr. Abdollāh Rāzī, *Tārīkh-e Kāmel-e Īrān*（Eqbāl, A.H. 1367）の時代区分を参照することによりアマーナトの同著作が従来からのイラン史の叙述に立脚しつつ革命後の現在までの「イラン近代史」をいかに説得的に叙述しているかを示そうとした。

最後に本報告の結論として、以下の3点を指摘した。①アマーナトの最近の著作『イラン近現代史』が提示している、「サファヴィー朝以降を近代とする」時代区分に基づいた歴史叙述は極めて説得的であり、それは立憲革命を近代の出発点とする従来の史観の限界（例えば近代史とそれ以前の認識上の「非連続性」の問題）を超える可能性がある。②但しその場合、所謂イラン史とイスラーム史の関係をどう捉えるのかという政治的にもいささか微妙な問題について各人の立場性が常に問われてくることは否定できない。③報告者としては今後イラン史の概要を語る際にアマーナトの議論を常に参照することになるだろうが、その場合日本における「明治維新以降の150年の近代化」という半ば常識化した自らの歴史意識を相対化していく視点を常に意識することが不可欠であろう。

3. レザー・シャー成立期のイランにおける選挙制度改革とナショナリズム：1304年選挙法改正（1925）

徳永 佳晃

20世紀前半のイラン立憲制研究において、立憲革命（1905–1911）後期に制定された1329年選挙法（1911）は、直接選挙に基づく男子普通選挙を規定した点で、議会制民主主義の観点から高く評価されてきた。その反面、同選挙法においては女性の参政権がないなど政治的マイノリティの権利保障が十分ではなく、加えて実際の選挙では地主層による小作人の動員が見られたことが先行研究で指摘されている。しかしながら、これらの研究は、選挙制度の運用が始まるなか、国民議会において、同制度の問題点がどのように認識され、その改善を図るためにいかなる立法措置が取られたか論じていない。以上を考察するため本発表では、1329年選挙法（1911）制定後初めての選挙法改正であった1304年選挙法改正（1925）を取り上げ、その理論的及び政治的背景、並びに国民議会での審議を分析した。また同選挙法改正が行われた1920年代半ばは、レザー・シャーによる組織的な選挙介入が始まった時期でもあり、上記の分析では、これらの選挙介入と1304年選挙法改正（1925）との関連についても言及した。

本発表は、「はじめに」「おわりに」に加え、以下3節から成る。第2節では、選挙法改正にいたる背景として、地方選挙における知事その他の公務員の選挙への介入が当時の新聞に盛んに取り上げられ、議会外でも注目を集めていたことに言及した。その上で第3節では当時の国民議会における議論を分析し、そこでは有権者としての判断能力を持つ識字者が選挙に参加すべきとする考え方が大きな影響力を持っていたことを示した。この考え方は、女性参政権及び選挙区間の一票の格差の問題に関して、テヘラン選挙民、すなわち首都の男性都市住民の優遇を正当化した。さらに地方選挙区の選挙を念頭に、これにおいて大きな影響力を持つとされた知事権力を抑制するため、中央政府、内務省の選挙への関与が明文化された。しかしながらこの措置は、新君主レザー・シャーのもと組織的に行われた中央政府の選挙介入を法的に支援したのみで、選挙不正の抑制には効果が乏しかった。

以上のように1304年選挙法改正（1925）における議論では、有権者としての判断能力を持つ識字者が選挙に参加すべきとする考え方のもと、首都の男性都市住民が地方選挙民及び政治的マイノリティに対して優位に位置づけられた。その考え方には、中央集権、都市男性知識人主導の国民創造及び近代化といった、レザー・シャー期のナショナリズムと共通の性格が見いだせる。

4. 20世紀初頭オスマン帝国における「3月31日事件」発生の一要因としての徴兵問題

矢本 彩

オスマン帝国で発生した「3月31日事件」（1909）は、青年トルコ人革命（1908）の「反革命」や「イスラーム主義」運動であると評価されながらも、実際には様々な背景をもった人々が多様な動機と思惑に基づき事件へ加わった利権回復運動であった。

先行研究では事件の原因が次の三点に類別されてきた。①青年トルコ人内部の対立、②叩き上げ将校対士官学校出身将校の対立、③マドラサ学生に課された徴兵免除試験再開の決定に伴う政府への反発である。同事件の研究対象は、事件が発生したイスタンブル地域に限定されることが多く、またマドラサ学生に関する研究も学生の学習状況やマドラサ制度全体に焦点があてられてきた。

以上の問題点から、本報告は「3月31日事件」の本質を明らかにするために、事件原因の三つ目に分類したマドラサ学生の徴兵免除試験再開決定後の詳細と動向を明らかにすることを目的とし、地方の学生の事例を公的史料から分析・考察した。

主要な史料は大統領府オスマン文書館所蔵のオスマン語公文書各種、『法令集（*Düstûr*）』、そしてオスマン帝国『官報』などの定期刊行物である。

以上の史料から青年トルコ人革命から「3月31日事件」発生までの陸軍省、大宰相府、そしてシェイヒュルイスラーム間のやりとりを時系列に沿って整理した。地方のマドラサ学生の実例としてシリアの学生からの嘆願とシリア議会および同知事からの電報等の記録を分析した。その結果として、イスタンブルと地方とにおいて徴兵

免除試験の再開に差異が設けられていたことにより人々が反発したことが明らかとなった。また新聞各紙でバヤズイト・ジャーミイにおけるマドラサ学生のデモ行動が記事として取り上げられていたことを示した。

以上から政府へ対するマドラサ学生の反発は中央のイスタンブルではもちろんのこと、遠く離れたシリアからも確認できたこと、そして地方議会や知事という当該学生以外からも嘆願されていたことを明示した。徴兵免除試験再開の決定はマドラサ内の教育制度の問題にとどまらず、より広い視野で調査・分析することが必要とされる問題であった。本報告では、シリアという土地柄の中央との差異を考慮しなかったため、今後は各地域の事情を考慮したうえで「3月31日事件」前後のマドラサ学生および地方の動向を詳らかにしていく。

5. イスラーム的制度としてのワクフとその法学的構築：クルアーン・ハディースとイジュティハード

Khashan Ammar

本発表では、ワクフというイスラーム的福祉制度がどのように法学的に構築されているかについて、ザカートと比較しながら、考察をおこなった。

預言者ムハンマド時代末期に起源を持つワクフ（寄進財産）は、後の時代に大きく発展し、マスジド（モスク）の建設や維持・管理など宗教的事業の分野に限らず、教育や学問、医療、はては動物愛護まで、イスラーム社会の福祉のために幅広く活用されてきた。イスラーム的な福祉制度として、ワクフはザカート（喜捨）に劣らぬ重要性を持っていると言える。

では、それはどのような典拠に基づいているのであろうか。法学的な典拠を精査すると、クルアーンにおいて、喜捨を意味するザカートとサダカの語（および同語根からの派生語）が登場する箇所はそれぞれ30、12を数え、インファーク（有意な支出）も28カ所で見られるのに対して、ワクフの語は一切登場しないことが判明する。法学者によってワクフの典拠とされている章句はすべて、寄付としてのインファークが推奨されている箇所である。

次に、イスラーム法の第2の典拠であるハディースの場合は、どうであろうか。この場合に、クルアーンの「章句を数える」ことが容易であるのに対して、ハディースは総数が決まっていないため、典拠となっているハディースを数えることは容易ではない。その方法論的な問題についても本発表で詳論した。方法論的な手続きを経た上でハディース集を調べると、ここでもワクフの典拠はザカートと比べると圧倒的に少ないことが判明した。

対象としたハディース集は10の伝承集である。2大『真正集』として知られているブハーリーとムスリムの伝承集、ナサーイー、アブー・ダーウード、イブン・マージャの預言者のハディースを中心する伝承集のほか、アブドゥッラッザーク・サヌアーニーとイブン・アビー・シャイバのサハーバ（教友達）やタービーーン（ムハンマドの死直後に生まれた世代）の言葉を多く含む伝承集などを精査した。

この結果、イスラーム的福祉制度としてワクフとザカートを比べると、ワクフのほうは賦課的法規定（フクム・タクリーフイー）についてもイスラーム的な適法性などについても、明文の典拠が少ないことが判然とする。実際に、そのためイスラーム法学の形成期からワクフをめぐるさまざまな議論がなされてきた。ヌズム論（イスラーム的制度論）の視点から見ると、ワクフ制度の法学的な構成はクルアーンとハディースの明示的なテキストよりも、イジュティハード（法解釈）に基づいていると結論づけることができる。

6. マムルーク朝後期カイロにおける都市と災害：ナイルの渇水を事例として

三橋 咲歩

前近代エジプト社会では、ナイルの季節による流量変化を利用した灌漑農業が営まれており、ナイルのもたらす様々な現象や問題をいかに管理・対応していくかが最重要課題のひとつであった。ナイルの流量変化とそれに伴う災禍は日常的に発生していたが、これを災害史の立場から考察する包括的な研究は、マムルーク朝期に関してはほとんど進んでいない。

そこで本発表では、災害記録が増加した15世紀において、「渇水の年」として記録されるほどの大規模な被害

をもたらした1450年の渇水を事例として取り上げ、それに対するカイロ社会の対応や社会生活への影響の分析を通じて、マムルーク朝政府の災害観について検討した。また、従来の研究ではあまり注目されてこなかったナイルの水位情報や、災害時の噂の在り方に注目し、民衆の間での災害の知識や経験の蓄積、共有の様相の一端を明らかにすることを試みた。

その結果、政府の対応は渇水発生直後に集中しており、渇水の影響を受けた社会混乱の助長を防ぐことに終始したものであること、また当時のエジプトにおいて稀に見る被害をもたらした本事例においても、特異な対応がとられることは無かったことが分かった。政府は、頻繁に発生する渇水を「日常的」なものとして捉えたいうえで、動揺する社会に対して「安心」をもたらすことを重視していたといえる。一方、災害下のカイロに広まった様々な噂からは、災害対応をめぐる、社会秩序の安定化を意図する政府と、災禍の解消を希求する民衆との間で、思惑のせめぎ合いがあったことも明らかにした。また、災害の経験という観点から後世への影響を見ると、少なくとも知識人の間では、個人の実体験や伝聞情報を織り交ぜながらこの渇水が語り継がれ、災害の記憶として共有されていたことが窺えた。

最後に、民衆の間では、様々な情報源に依る水位情報や、ナイルについての知識、過去の災害経験が蓄積されており、災害時のみならず平時のナイルに関する噂にも、それを踏まえた社会の不安感や期待感が反映されていたことを指摘した。また、以上のような知識・経験の蓄積と共有は、ナイルのもたらす諸災禍に対する不正な情報操作やデマの流布といった、社会混乱に繋がりうる「危険性」を未然に排除するという民衆レベルでの災害対応においても、重要な機能も果たしていたと考えられる。

7. 19・20世紀転換期のアフガン人による武器交易の再検討

小澤 一郎

本報告では、19・20世紀転換期に英領インド・アフガニスタン・イランの境界地域（「西アジア・南アジア境界域」）で活発化したアフガン人の武器交易を検討対象とし、従来この問題が主に英領インドの治安政策や辺境支配の観点から研究され、交易活動の背景や歴史的意義が検討されなかった現状にかんがみ、ユーラシア大陸やインド洋海域世界の交易史や文化人類学的研究との接続も意識しながら再検討を行うことを目指した。

報告では、西アジア・南アジア境界域および隣接するペルシア湾沿岸地域の状況を説明したのち、アフガン人の武器交易活動の概要を提示し、その特徴として以下の諸点を指摘した：①交易に参加したアフガン人は遊牧的背景を有する交易民「ボーウィング」であり、交易活動の季節性や行動パターンにも遊牧民的性格が看取される；②交易者の一部は海を渡り、武器買い付けのためにマスカトで、隊商の準備のためにペルシア湾北岸各地で活動したが、各地への移動には近代的交通手段である汽船を利用する一方、武器を輸送するマスカトからの復路では、取り締まりを回避するためにあえて伝統的手段であるダウが用いるなど、選択的姿勢が見られる；③陸上での交易ルートは、政情不安や現地政権の政策を背景として英領インド側より取り締まりが緩かったイラン領・アフガニスタン領を通過する傾向があり、また陸揚げ地点にはペルシア湾北岸地域に多数存在する入り江を基礎に成立した小規模な港が、隊商の通過には砂漠に近いような乾燥地帯が選ばれるなど、取り締まりの行き届きにくい地理条件も活用されていた；④彼らの交易活動はペルシア湾両岸にネットワークを有するバルーチや19世紀以降この地域に進出してきたフランス人などとの協力関係の下に成立していた。

以上の考察から、当時のアフガン人の武器交易活動が「境界領域」たる西アジア・南アジア境界域の性格を反映し、彼らが三国家の近代化や辺境支配の差異を縫う形で活動したこと、交易には前代からの継続と近代における変化の両面が観察され、また他の交易諸集団との関係構築をその背景としていたことを明らかにできた。そのうえで、このような交易民としてのアフガン人の才覚と存在感は、「治安の素乱者」といった従来のイメージの相対化と、新視点に基づく彼らの活動のさらなる再検討を促しうると結論付けた。

8. マディーナット・アッ=ザフラー王宮址の柱頭のプロポーションについて

安岡 義文

本発表では、アブド・アッ=ラフマーン3世の元、キラーファとなった後ウマイヤ朝にて建造されたマディーナット・アッ=ザフラー王宮址（以下ザフラー宮）から出土した柱頭のプロポーションを分析し、スペイン・アンダルシア地方特有の美術様式の起源について考察した。

まず様式に注目すると、ザフラー宮の柱頭の加工技術は、同時代のビザンティン建築のそれと同じであるが、柱頭の形は、あくまでも帝政ローマ期に考案されたコリント式とコンポジット式柱頭の型を意識していた様子が窺える。これは、コルドバの大モスク（メスキータ）を始めとした、ザフラー宮造営前のイマール期の大規模建築プロジェクトにみられるように、周辺遺跡からのスポリアに大きく依存しているのに対し、ザフラー宮では、国内外から集めた大理石をふんだんに使って独自の柱頭様式の確立したことがわかる。

次に、柱頭の諸部位の比例関係を分析すると、ウィトルーウィウスの『建築十書』のコリント式柱頭のシュムメトリアの技法に類似している点が指摘できる。ザフラー宮の柱頭は、上面の幅と奥行、そして柱頭高さを同じ長さにしており、立方体のブロックが想定されている。次に、立方体の高さを10等分して、下部2段の葉飾りの上端高さに各3部分ずつ与えている。残りの4部分は、コリント式では1部分をアバクス高さに、3部分をヴォリュート高さとしている。一方、コンポジット式では残り4部分をさらに5等分し、1:4に分配している。柱頭上部平面には、複数の刻線が刻まれている。まず、45度間隔で基準線を引いた後、水平、垂直線を中心軸として上下あるいは左右に15度ずつさらに刻線を引き、合計30度の振れ幅をもつヴォリュート間の装飾要素の輪郭を規定している。また、対角線に対しては振れ幅を15度と半減させてヴォリュート上部に載るアバクスの輪郭を規定している。

この一連の比例関係をウィトルーウィウスの『建築十書』のコリント式柱頭のシュムメトリアの記述（第4章第1節）と比較すると、主要な規定部位と規定方法は一致しており、変更が加えられているのは部位間の数値関係であることがわかる。後ウマイヤ朝の人々がどのようにしてウィトルーウィウスの伝えるシュムメトリアの技法を知るに至ったかについては複数の可能性が考えられるが、これらについては今後キラーファ期前後のアンダルシアの柱頭のプロポーションの分析を充実させながら考えていきたい。